
或る土蜘蛛の狂想曲 [2]

沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る土蜘蛛の狂想曲「2」

【Nコード】

N4143W

【作者名】

沙

【あらすじ】

タイトルを見ていただければ判るかと思いますが、拙作「或る土蜘蛛の狂想曲」の続編です。

前作よりはシルバーレインらしく「死と隣り合わせの青春」になりそうな気がしますが、それはそれ。

キャラクター的にはオリジナルですが、世界観のオリジナル要素は最低限に抑えているつもりです。

R-15は「ちょっとエログロがあるかも」程度でつけているので、

そんな感じと思ってください。

S a f e t y B a t t l e

その部屋では、先程から金属同士を打ち合ったような音や、激しく動き回る音が鈍く響いていた。中に居る3人の人影のうち、2人が戦っているのだ。

上にあがる出入り口の階段以外は、窓も什器も何も置いていない。天井も壁も、そして床も打ちっぱなしのコンクリートでできた、15m四方ぐらいの広い殺風景な空間は、『牢屋のような』という形容が似合うかもしれない。もっとも、一般的な牢屋よりは遙かに広かったが。

天井には1本の蛍光灯が単調な白い光を放っているが、部屋全体を照らすにはやや足りないようで、その薄暗さが部屋の無機質さをより強調しているようにも見えるかもしれない。

部屋の壁に寄りかかって戦いを見守っているのは、ややだらしない印象を与える安物の、何やら大量の英文がプリントされた黒いTシャツに、ジーンズとスニーカー、というラフな服装の細身の長髪の青年だ。歳は20を過ぎたぐらいだろうか、高校生よりはかなり大人びている。やや面長の顔に無関心ともとれる軽い表情を浮かべてはいるが、その目だけは真剣なことは、少し注意すれば誰でも気がつくだろう。

その男の目の前に、戦っている相手と距離を取ろうと飛び退いてきた少年が立った。近くで見守る青年を気にすることもなく、右手に握っているリボルバーのような形状の黒い詠唱銃を両手でしっかりと構える。

戦闘によるダメージか、いくつもの傷と僅かな血がついた銀誓館高校の男子夏服に身を包み、やや乱れた癖のある髪の下で正面を見据える彼の目には、殺気こそないものの、まさに今戦っている相手を見据える力強い意志が感じられる。

少年が引き金を引く。一般的な銃であれば弾倉になっている部分に取り付けられた詠唱回路が、それに応えるかのように僅かな音を立てて回転するが、その音は直後に飛び出した銀色の尾を引く弾丸が風を切る音にかき消された。

火薬により弾を撃ちだしているわけではないので銃声はしないが、銃の特性か、僅かな詠唱銀が周囲に煙のように飛び散る。一般的な銃との外見上の違いは、その煙が天井の数少ない蛍光灯の光を反射し、僅かに輝くことぐらいだろう。

そして発光し流星のような輝きを残して弾丸が飛んでいく先には、少年と同じぐらいの歳の少女が居た。戦いを見守る青年や詠唱銃を撃った少年とは異質の服装。白い着物と赤い袴、いわゆる巫女装束に身を包んでいる点が一番目立つだろうか。ちなみに、こちらは少年の服装と違い、あまり傷ついてはいなかった。切りそろえられた前髪と、戦闘の影響が少し乱れてはいるものの長く伸ばした長髪もまた、彼女の服装に似つかわしいと言えるだろう。

絶世の美女、という程ではないが、いわゆる美少女に属する顔立ちとは少年と同じく、殺意を伴わない純粹な戦意に満ちている。

少女の右手にはやや刀身の短い日本刀が握られている。否、普通の日本刀ではない。鐔の上部に少年が持つ詠唱銃と同じような詠唱回路が取り付けられてあるし、柄頭（持ち手の一番先）には細い金属の鎖がついていた。その鎖の先は少女の左手に握られている。

普通の少女であれば、銃を向けられた時点でパニックを起こすだろうし、そこから放たれた銃弾を目視したところで反応などできる筈もない。だが、言うまでもなく、能力者である彼女は（そして少年もだが）そんなことはなかった。

「はっ！」

必要以上に気負っているわけでもないが、それでいて気合いの入った声と同時に、金属と金属がぶつかるような音が部屋に響き渡る。少女が、彼女の左から右上に向けて振るった鎖剣の「剣」の部分が、

飛んできた詠唱銃の銃弾をはじき飛ばしたのだ。無理矢理進路を曲げられた銃弾が、先程よりは弱い光を残して天井に吸い込まれ、僅かに鈍い音を立てる。

挟まれたコンクリートの破片がパラパラと音を立てて少女の頭上から幾何か降り注ぐが、それを意に介さず、銃弾を弾いた時に振り上げた右手をそのまま振り下ろすようにして手に持った刀を投擲する。それはどちらかといえば、戦闘よりは「舞い」に近い動きだ。和服の大きな袖がそれに追隨し、白い軌跡を描く。

投擲された刀は「ヒュッ」という風切り音を残し、少年めがけて一直線に飛んでいく。これまた常人では反応し得ない速度だが、少年はギリギリこれに反応し、真横に飛び退いた。

少年を捕らえそこねた刀が、一瞬前まで彼が居た場所を駆け抜ける。彼の制服の肩にあたる部分の袖に僅かに切り込みをいれてはいるが、体を傷つけるには至らない。一方、横に飛び退いた少年は左手を握るような動作をしたかと思うと、次の瞬間、何かを「撒く」ように左手を振りながら手を開いた。

非常に目が良い人なら、少年の動作によって 正確には、少年の動作が呼び出した、というべきだが 詠唱銀の粉末が、微量ではあるが周囲の広範囲、というより部屋全体にばら撒かれたことに気がついたかもしれない。

「うえっ!？」

戦闘を見守っていた青年がいち早く、少年の意図に気がついたのか、やや軽い調子の驚き声をあげて両腕を体の前で交差させて防御態勢を取る。

一方、少女のほうは一瞬反応が遅れたのと、投げた刀を回収するために鎖を操っていたことで反応が一瞬遅れている。彼の動きに反応はできているし、意図も理解しているのか目を見開いてはいるが、防御態勢を取る余裕はない、といったところだ。

少年の右腕に握られた詠唱銃から微量の火花が散る。それは弾丸

を撃ち出した時に比べればあまりに弱々しい威力だったが、周囲に充満した詠唱銀の微粒子を引火させ、爆発を起こすには十分なエネルギーを持ち合わせていた。

部屋中が轟音に巻き込まれる。詠唱銀が「粉塵爆発」を起こしたのだ。否、爆発が起きるほどの詠唱銀を一瞬で散布して点火する、ゾンビハンターの攻撃技法の1つである。^{アベリテイ}発生する炎は一般の物質が起こした爆発には及ばないが、轟音と閃光、そして衝撃は、まさに爆発の名に恥じないものだ。

防御は間に合わなかったのか、全身の痛みにも少し顔をしかめながら、少女は周囲を見渡していた。だが、ただでさえ爆発の閃光で相手を視界を遮っている。塵が視界を遮っている。

同じ場所に居れば、飛び道具を持っている相手の恰好的になる。そう判断したらしい少女は左手の袖で口元を押さえながら、右手の刀を構えつつ摺り足で後ろに下がる。走ったほうが移動は速いが、音で相手に位置を気取られることは避けたかったのだ。

この場合、背面からの攻撃を避けるために壁際まで移動するのは正解だった。もちろん相手もそのことを知っている以上、ベストとは言いがたいが、それでもベターであることには変わりなかった。だが、少年はそれを正確に読み、そして奇策を仕掛けてきた。

煙が立ちこめ、まだ視界が奪われている状態で、少女は確かにタタツという、コンクリート上を走る音を聞いた。だが部屋の性質上、音が中途半端に反響し、どちらから聞こえてきているかの判断に一瞬迷うのは仕方がない。それでも少女は、音が自分にとって左側から来ることを確信していた。

とっさに少女がとった行動は、相手が上半身を狙ってくることを想定して身を沈めつつ、走ってくる相手に引っかかるように鎖剣の

鎖の部分を左側の低い位置で振り回したのだ。そう、先程の動きを「舞い」と言うならば、今度は「踊る」ように、流れるような動作だった。

実際のところ、少女の読みは、半分正解で半分間違っていた。確かに少年は、少女の側面から攻撃を仕掛けてきたのだ。

詠唱銃の後ろ側からロケットのように噴射させた青白い炎を噴出させながら、突進の勢いを乗せて少年が突っ込んでくる。その銃を握った腕は、数秒前、少女の肩があったあたりを通り過ぎ、一瞬遅れて上半身に追従するように動いていた長い髪の一部を詠唱銃の後ろから迸っていた炎熱が焦がす。

少年からしても少女の正確な位置を把握していたわけではないため、正確とは言いがたい攻撃だったが、それでも回避していなければしたたかに肩を打ち据えられていただろう。

攻撃を回避しつつも、少女の目が、或る疑問のために少し見開かれる。攻撃を受けたことは想定の内だったが、問題は自分が振るつた鎖にまったくの手応えがなかったことだ。攻撃が来る方向は正確に読めていただけに、それは不可解なことだった。

一瞬の後に少女の疑問は氷解する。原理は単純なことだった。常人にはなし得ないが、世の常識の外に居るのが能力者である。身体能力や、可能な動作は、特に起動状態であれば桁違いとも言える。

そう、少年は「壁を」走ってきたのだ。壁も床も同じ材質であれば足音は同じになるし、音の聞こえてくる方向もそう変わらない。

とはいえ、その驚きは彼女の動きを鈍らせるわけではなかった。

次の瞬間には、彼女の右手に持った刀が、それを握る手ごと強烈な炎を帯びる。刀身が燃えている、というよりは炎を噴き出している、といった動きである。紅蓮の炎に照らされて白い着物が桜色に染まり、髪は柑子色オレンジに光る。そして唯一、炎の色に染まっていない彼女の双眸だけが、彼女の右斜め前で体勢を立て直そうとしている少年を、まっすぐに見据えた輝きを放っていた。

攻撃が空振りに終わったことに軽い落胆をしながらも振り返った少年は、その美しさに一瞬、少年は心を奪われそうになるが、そんな余裕がないことは言うまでもない。次の瞬間、気合いを込めて決めるように突き出された右腕の炎の塊を避けようとする。

「っ！」

足場がしつかりしていれば、それを蹴って避けることは可能だっただろう。だが、壁を走るという変則的な動きから、重力に従って地上に立つ体勢に移行する途中だった彼にそれを望むことはできなかった。

少年はその体勢で可能な防御を最大限に行っていた。腰を捻って上半身を無理矢理に少女の方を向け、更にのけぞるように反らしつつ両腕を体の前に出してガードすることで攻撃のダメージをある程度減らすことには成功したのだ。

だが、それでも少女の狙いすました一撃の勢いを殺しきれるものではなく、右手の前腕を大きく挟まれる結果となった。ミシッという音がし、その直後に少年が床に転がる音と、苦痛からか咳をするように息を吐き出す音が重なる。悲鳴をあげなかったというよりは、悲鳴を出すことに失敗した、といったところだろう。もっとも、常人なら痛みで気絶していたかもしれないが。

取り落とした詠唱銃が床を転がる音が、少し遅れて響いてくる。既に刀は腕から引き抜かれていたが、その刀身の先端の幾何かは、先程の炎とは違うもつと濃い赤い色彩に染められていた。

少年がすぐには体勢を立て直し、戦闘を続行できないことは明白だった。少女が刀を右下に振り下ろし、飛び散った血が床に僅かな赤銅色の線を刻む。注意深い人がこの戦いを見ていたとしたら、このとき少女の顔にも一瞬だけ、後悔や苦痛に近い表情が浮かんだことに気がついたかもしれない。

能力者が戦う相手は、時として既に「死んでいる」ことがあるので、「殺し合い」という表現が正しいかは議論の余地があるかもしれない。

れない。が、それは兎も角、この戦いがそうだった本気の「殺し合い」であれば、更なる追撃が少年を襲ったことだろう。

だが、そもそも少年と少女のどちらにも「殺気」は終始、なかったのは先程書いた通りである。実際に相手を倒せる、あるいは斃しうる武器を使っては居るが、当人達が発している気配は、あくまで試合のそれだった。

パチン

という音が、さきの粉塵爆発の煙がやっと沈静化し、やや澱んではいるものの部屋全体がどうにか見渡せるようになってきた部屋中に響き渡る。試合を眺めていた青年が両腕を叩いたのだ。

「そこまで。　まあ、こんなもんか。」

青年が口を開く。刺された右腕を左手で押さえつつ、流石に隠しきれない苦痛を顔に浮かべながら少年が立ち上がり、少女はどこからか取り出した懐紙で刀についた血を拭き取りはじめる。

口調そのものはどこかたるんだ印象を与えるが、青年の表情、その視線は先程と同じように真剣である。そして、今しがた戦闘していた2人が少し落ち着いたのを見て話し始めた。

「佐々木い、面白いことするようになったな。進歩してんじゃねーか。けどよお、そういう必殺技は絶対に当てるよ？カウンター貰ってるようじゃ正攻法に劣るぜ？」

佐々木、と呼ばれた少年は黙って頷く。苦痛はある程度ひいてきたのか、表情は少し落ち着いてきている。とはいえ、顔に浮かんだ脂汗や、肩で息をしているところから、戦闘のダメージや疲労が少なからぬことは誰でも分かるだろう。

「夕風はまあ、そんなもんか。可もなく不可もなく、ってとこだな。」

少女のほうは少年より疲労の度合いが少ないらしく、軽く肩で息をしていたのだが、それを聞いてぺこりとお辞儀をした。

「まー、特に問題ねーだろ。このまま2人とも精進しろや。」

満足した、と言いたげに右手をひらひらと振ると、青年は近くの階段までゆっくりと歩いていく。後ろから聞こえてくる2人の、

「ありがとうございます。またよろしく願います。」

「ありがとうございます。精進します。」

という返答に、特に何か返すわけではないが、満足そうな表情を浮かべて立ち去っていく。

彼の名前は石附・洋平^{いしづき・ようへい}、銀誓館学園の第一期卒業生であり、現在は教師を目指す大学生として母校である銀誓館に教育実習で来ている。特別強いわけではないが、それなりにゴースト退治の場数を踏んできた彼は、能力者になった後輩の指導を比較的熱心にやっていた。

戦っていた少年と少女については、最早言うまでもないだろう。

少年は半年ほど前にゴーストを『視て』しまった故に能力者になった佐々木・勇一^{ささき・ゆういち}、元は勇一に飼われていた蜘蛛童が羽化して土蜘蛛の少女となったのが夕風^{ゆうなぎ}だ。

ちなみに夕風は、学校など人前では、以前、蜘蛛童だった頃の飼主の苗字を借りて神谷・夕風^{かみや・ゆうな}と名乗っている。学園がどうやってか手を回して、本人の希望通りの名前の戸籍やら住民票やらを用意してしまうあたり、勇一は銀誓館学園の凄さを再認識したものだった。世界結界とか裏の繋がりとか、知らないほうが幸せでいられそうなモノはこの世の中には多々あるものだ。

洋平が部屋から出ていったことで気が緩んだのと、戦闘の疲れやダメージから、思わず地面にへたりこんだのは二人ほぼ同時だった。思わず顔を見合わせて苦笑する。

「あの、勇一さん、ごめんなさい。痛かったですか？痛かったですよね、ごめんなさい、ごめんなさい。」

心のスイッチが既に戦闘から日常に切り替わっている夕風は、少し泣きそうな顔になっている。この戦いを模擬戦とするならば勝者

が彼女であることは疑いない事実だが、それを誇る気は彼女にはない。むしろ、恋人を（すぐに治癒できるとはいえ）傷つけたことが辛いらしい。

勇一が望んだことであり、本質的には彼のためになるとか、もちろんお互いの合意の上での模擬戦であるとか、そういう客観的な事実がこの際何の意味もなし得ないのは、有り体に言ってしまうえば愛ゆえに、といったところだろうか。

既に夕凧が、最近体内で飼い始めたという黒燐蟲を勇一の武器に這わせている。そこから進む力が勇一の腕の傷を急速に治癒していくのだが、勇一からするとこれも結構キツイものがある。

夕凧の元の性質からか黒燐蟲は蜘蛛のような外見なので（蜘蛛が苦手ではない）勇一にとって、そこまで生理的にキツイものではないが、むしろ自分の傷が高速で治癒することに違和感を感じてしまふのだ。

無理もない、能力者になってからまだ半年ほどであり、ましてや能力者としての戦闘の訓練を開始し、その中で自分の「人間ならざる頑強さや回復力」を実感したのは1ヶ月ほど前なのだ。理屈は理解できていてもすぐに慣れるかといえば、そう簡単なものではない。「気にすんなよ。しかし、夕凧にはなかなか勝てないなあ」

実のところ数日前から練っていた策であり、今回はクリーンヒットは狙えるか、と思っていた必殺の壁走りが空振りだったので少し落胆していた。

これには理由があつて、顔面に当たったら流石にまずい、という思いが、本人の意識の外で少し悪い方向に攻撃の向きを変えていたのだ。勇一自身は、そういう発想があることは前々から自覚はしていたし、先輩である洋平に相談したり、模擬戦のときはできるだけ割り切るようにしていたが、完璧ではなかった、といったところだろう。

ちなみに洋平に相談した時には、

「馬鹿野郎、相手がリリスだったらどうするんだよ。ま、そういう

発想、嫌いじゃねーけどな。どっちにしろ克服できないなら何かわりの方法は考えねーと駄目だぞ。」

と、悲しいぐらい正論を言われたのだった。

「いえいえ、ちょっとビックリしちゃいましたよ。勇一さん、恰好よかったです！」

断言するまでもない。同じ世代の女子にそう言われて嬉しくない男子など、滅多に居ないだろう。夕凧ほど積極的に愛情表現はしないにせよ、最近は自分が夕凧に好意を抱いていることを自覚できる程度にはなっているのだから尚更だ。

「そ、それは、うん、ありがとう。」

照れと、僅かな歯がゆさを隠しながら勇一が答える。彼からすれば、理想は「夕凧を守るぐらいに」強くなることなのだ。だが現状では彼の戦闘力は夕凧に及ばないことは明白で、それは理屈抜きに何となく無力感を感じさせる結果になっていた。

もちろん、夕凧は（蜘蛛童として、ではあるが）戦闘経験は十二分に持っており、それ故に間合いの感覚や立ち回りはある程度完成していた。それこそ今まで蜘蛛の姿だったのが人型になったので、最初は戦闘時の動きに戸惑った部分もあったようだが、今ではその差も完全に吸収している。

故に、学園のナント力という方式で測定した能力者としての数値的な強さ（所謂レベル）でいえば、勇一も夕凧も大差はないのだが、実戦経験の差がそのまま、模擬戦で勇一が19連敗、という結果に繋がっているのだった。

「ふう、なんか疲れたな。そろそろ帰ろうか。」

「はい。あ、スーパーに寄ってからでもいいですか？夕食の材料を買いたいので。」

「あー　なんか悪いなあ、いつも。」

結局あれから、ずっと料理は夕凧に頼りっきりの勇一である。悲しいかな、自分がやるうとしても夕凧の料理を超えることはまずで

きないし、そうでなくとも夕凧に「私の料理、駄目ですか？」と泣かれるダメージのほうが、料理を任せっきりにすることの申し訳なさより彼にとってはキツイのだ。

ついでに言うと、洗濯全般も夕凧に任せっきりである。最初はお互いにわけて洗おう、と提案したのだが、「洗剤や水道代が勿体ないじゃないですよ。大丈夫です、私がやりますっ。」としごく常識論で論破されてしまった。かといって、姉妹が居るなら兎も角、弟しか居ない高校生の少年にとって、アレとかアレとか、色々と連想させてしまうモノを洗って干す作業は無理がありすぎる。

よって、部屋の掃除や買い物は受け持っているものの、家事における勇一の負担はかなり少なくなっていた。前述の事情により一部は仕方のない側面もあるが、やはり色々と心苦しいものもあって、そのうち改善しよう、そのうち、と考えながらだらだらきているのが、要するに今の彼である。

イグニッションを解く。勇一は高校生男子の制服のままだが、服にあった傷などは無い。そもそもイグニッション中に着ている制服はカードに封印されているモノで、イグニッションを解けば、その前に着ていた制服に戻る、というだけのことだ。便利なことに、かすり傷や先程の腕の傷を押さえてついた血なども一緒に消える。

一方の夕凧は、銀誓館の女子夏服に戻っていた。彼女曰く、以前、蜘蛛童だった頃の飼い主が着ていた品らしい。サイズがぴったりあうのは運が良かった、とのことだ。

コンクリートに囲まれているのと、どこかに空調がついているから、やや冷たい空気だった部屋の階段を上がり、外に出る。先程の部屋は、能力者の訓練用に作られたアビリティの衝撃にも耐え、ある程度の防音性のある地下室だったのだ。銀誓館にはこういった部屋が幾つもあるらしい。

むっとした空気が体を覆う。能力者であろうとなかろうと、暑い

ものは暑いのだ。炎に焼かれたときの耐性は一般人より遙かに高いだろうが、夏の暑さへの耐性は実のところ大差ない。少なくとも苦痛の度合いとしては。

既に8月も終盤にさしかかっているし、既に時刻は5時近い夕方であるが、暑さが衰えた気配などまったくない。

ちなみに、言うまでもなく今はまだ夏休みなので学校の授業はない。一部の能力者はゴースト退治のために欠席した授業の分の補講を受けているが、勇一にはそれもなかった。だからこそ、こうして模擬戦形式の実戦訓練を受けることができるのだ。

模擬戦が終われば学校に残る理由もないし、勇一にとっては万が一、クラスメイトが来ていて、それに見つかれば何を言われるか判らない、という思いもある。だから2人はそのまま帰ろうとしたのだが、職員室の近くを通ったところで見知らぬ男性教師に呼び止められた。

「えーと、佐々木と神谷、だったか？ ちょっと指導室で話そうか。」
指導室というのは、生徒指導室のことだが、能力者の生徒にとっては「能力者として必要な報告・連絡・相談をする場所」として使われる、幾つかの特定の生徒指導室を指すことが多い。事実、その教師に連れて行かれた先はそういった「能力者向けの」生徒指導室だった。

木でできた簡素な長い会議卓を挟んで、片方にその教師が、反対側に勇一と夕風が、パイプ椅子に腰を下ろす。

勇一はあらためて教師を見る。やや色黒で引き締まった体格をしている。上半身は白い無地のTシャツ、下はジャージのズボンをはいているあたりから見ても、体育か何かの教師だろうか。見たことがない教師なので、小学部や中等部の教師かもしれない。表情は、何というか普通だ。怒っているようでもないが、どうでもいい雑談

をする、という雰囲気でもなかった。

あまり冗談を言うような顔ではない、と思っていたのもあって、教師の第一声は勇一にとってはまさに「奇襲」だった。

「ちよいとゴースト絡みで頼みがあるんだが。お前等、2人で結婚してくれないか？」

Irregular Mission

「ちよいとゴースト絡みで頼みがあるんだが。お前等、2人で結婚してくれないか？」

教師が真顔で口にした言葉は、前半部分は想定していた範疇であり、後半部分は勇一にとって完全に想像外だった。もっとも内容が内容だけに想像できる方が普通ではない。夕凧のほうも、とっさに両手を口にあてて目を丸くしている。

夕凧に関しては、普段の挙動から考えれば、もう少し心の準備ができていれば喜んで踊り出したかもしれないが、流石にそこまで余裕はないようだ。それ程までに唐突な話である。ゴースト絡みで、結婚？

「つと どういうことでしょうか。」

教師の表情を読み取ろうと、やや強い視線で相手の顔を見据える勇一。人によつては僅かな怒気を孕んでいるようにも見えたかもしれないが、彼にその意図はなかった。

同じクラスの悪友なら兎も角、教師が自分を目的無くからかくると思えないが、ゴーストと直接関係なさそうな言葉が出てきたことに冗談のような空気を感じたのも事実だったからだ。

その勇一の視線を正面から受け止めた教師は、一瞬迷うようなそぶりを見せてから口を開こうとする。だが、それよりも早く、部屋のスライド式の扉が開かれる音がした。部屋の中に居た3人の視線がそちらに集中する。

「詳しくは私から説明させてください。」

部屋に入ってきたのは中等部の女子制服に身を包んだ女の子だった。やや無表情な顔と、あまり個性を感じさせないセミロングの髪型からどこことなく地味な印象を醸し出している。

とはいえ、世間知らずやネクラという程には見えない。どのクラ

スにも最低1人か2人は居る、休み時間にあまり騒がず自席でじつとしているタイプの女子、といった感じだ。

入ってきた少女はごく自然に会議卓まで歩いてきて、さきの教師の隣に座った。ぱつと見たときには気がつかなかったが、よく見ると脇に黒い板状のものを抱えている。

コトンという音を立てて机の上に置かれた黒い板状のものは、最近普及し始めた、液晶画面にタッチすることで操作できるパソコンのようなもの。いわゆるタブレットだ。

勇一も使ったことはないが、それがどういうものか程度の知識は持っている。

「あ、申し遅れました。私は中等部2年の三嶋・茜^{みしま・あかね}です。運命予報士、です。」

茜と名乗った運命予報士は、淡々と言いながらタブレットの電源をいれた。あまり抑揚のない言い方をしているが、本当に無感情だった。あるいは感情表現が苦手であるようににはあまり聞こえない。どちらかというと、努めて冷静になろうとしてそんな風になってしまったような印象だ。

ちなみに、勇一の推察はかなり正鵠を射ている。もちろん彼には知り得ないことだが、ゴーストによって家族を失った茜にとって、ゴーストという存在そのものが憎い相手だったし、同時に恐怖の対象でもあった。だから、それと戦ってくれる能力者は心強い存在であり、ゴーストと直接戦えない自分の無力感と呼び起こす存在でもある。

そして、これから戦いに行く同朋の前で自分の無力感や葛藤を表に出すわけにもいかない、と考えた結果として無表情を貫こうとするのは、つまるところ彼女なりの、配慮やけじめのようなものだ。

大人によって編成された軍隊のような組織なら「適正」や「職務」と割り切ることもできるだろうが、まだ15にもなっていない少女にそれを求めることには無理がある。

しばらく表示されていた読み込み中のロゴが消えて、タブレットが起動する。

茜が少し操作すると、白をベースにした華やかなインターネットのWebページが表示された。ページのトップには何やらイタリア語らしい名称が書いてあるが、本文は日本語である。そしてそれは、所謂チャペル式の結婚式場の宣伝だった。場所は都内の東京湾に面した場所にあるらしい。

「この結婚式場と、併設されたホテルでゴーストによる事件が起きます。いえ、既に起きて犠牲者が出ていますが、これ以上の犠牲者を増やすわけにはいきません。ですが。やや、面倒な状況になっています。無関係なゴーストが2体、居るのです。」

そこで一呼吸置いた茜が、勇一と夕凧を一瞥する。勇一には、その瞳がやや不安げに思えたが、あえて口にするつもりもないだろう、と思った。

「1つめですが、地縛霊がチャペルに併設されたホテルのスイートルームに居ます。地縛霊の特殊空間に引き込まれる条件は併設のチャペルで結婚式を挙げたカップルが、そこに宿泊することです。結婚直後に何らかの理由で無理心中を強いられた女性の地縛霊のようですね。この特殊空間には2人の人間しか入り込むことができませんが、かなり弱い地縛霊なので大丈夫でしょう。」

それはつまり、銀誓館の一般的なゴースト退治の手法である「8人前後の生徒によるチーム戦」ができない、ということである。そして、理屈は判らないでもないが、非常に頭の痛い特殊空間が開く条件がおまけしていた。なるほど、それで「結婚」か。何となく、自分達が呼ばれた理由を理解する勇一だった。

「そして2つめ。ホテルの宿泊客としてリリースが潜り込んでいます。こちらもまた、かなりの数の犠牲者を出している上に、どうやら銀誓館の存在を知っています。そこで、今回の依頼は、これら2つのゴーストを同時に討伐することになります。」

「補足させて貰おう。」

茜が言い終わるのを待つて、教師が口を開いた。先程より僅かに声のトーンが低くなっているのは、本当に真剣に話しているからだろう。

「リリスは地縛霊の存在を認識している。そんなリリスを無視して能力者が地縛霊の討伐に向かった場合、リリスは近くの能力者を認識できるから、ほぼ確実に逃げてしまっただろう。だから先にリリスを討伐したいところだが、ホテルの中から滅多に出てこないためホテル外で倒すことは困難だ。」

つまり、ホテルに籠城している、ということか。確かに大きなホテルの中には色々な施設があるから、リリスにとっての「食糧」を見つけるのは比較的容易なのかもしれない。

おぞましい話ではあるが、勇一も前にリリスに襲われたことがあるので、それがどういふことかは理解している。

今度は茜が口を開く。

「そしてホテルの中でリリスを倒してしまうと、世界結界により宿泊客が行方不明、あるいはホテル内で殺された、ということになってしまう可能性があります。そうなればホテルは閉鎖され、地縛霊退治は困難になるでしょう。そこで、今回はリリスと地縛霊の討伐を同時に行うべき、となりました。」

教師の後に続いて茜が言う。理屈では確かにそうなるだろう。だが、勇一にとっては最大の疑問が残ったままだった。

「で、何で俺　俺や夕凧なんですか？」

勇一は最近になって力を付けてきたとはいえ、実践経験にはまだ乏しい。他に銀誓館には適任が多数居るはずだ、と勇一は考えたのだ。

そして、その質問に対する教師の答えは、

「万全を期するため、比較的、銀誓館に入って期間が浅い生徒に頼みたいんだ。敵、リリスが銀誓館のことを知っている以上、生徒の情報を集めている可能性もあるからね。そういった生徒の中で、あまり無理がなく18歳以上に化けて新郎新婦として振る舞えるだけの

信頼関係がある男女、という条件が2つめだ。」

ということだった。

更に、君達は話を聞く限り、実戦さながらの訓練でそれなりに経験を積んでいる、と聞いている。そこまでの条件を満たせる生徒は殆どいないんだ、と教師は付け加えた。

言っていることは正しいのかもしれない。が、それって何か俺たちのことを狙ってないか？と頭を抱える勇一の態度をあえてスルーして、

「そういうわけで、お願いできないだろうか？」

と、教師が真剣な顔で言うので、断り辛い雰囲気ではある。

理由はどうあれ、この先生と運命予報士は自分達のことを信用してくれているのだから。少なくとも学生を「捨て駒」にするような学校ではない、ということは勇一も知っているつもりだ。

故に、戦力的に自分達で大丈夫、という点はこの際、前提としていいのだろう。だが、それと同時にゴーストと戦うことの危険性も勇一は熟知していた。

危険性への認識、という点においては、1人で居るときにゴーストに襲われた経験を持つ彼は、銀誓館の中でも慎重な部類だった。集団でゴーストを相手にするよりも遙かに大きな恐怖を経験しているのだから、それは臆病とか心配性といったものではなく、むしろ他の生徒が無頓着なだけ、という側面すら無いとは言いい切れない。

だから勇一は即答は避け、もう少し色々聞こうと考えた。聞

こうと考えたのだったが、それを状況が許さなかった。

「はいっ、やります！頑張りましょうね、勇一さんっ！」

幸せそうに目を輝かせて食い入るように教師を見つめる夕凧。そのうち両手を机に載せたまま立ち上がって、教師に顔を近づけそう

だ。あ、立った。やっぱりやりやがったよ。

そしておそらく教師も、2人の関係や状況を知っていたのだろう。むしろ、先程の言から察するに、勇一や夕凧に能力者としての戦い方を教えている洋平も一枚噛んでいるか、最悪この教師とグルにな

っていると考えるべきだ。

逃げ場なんか無いじゃんよ、俺。

結局は、そうなるのだ。

その後、教師と運命予報士の茜から受けた説明は、勇一にとって、苦痛とは言わないものの、結構な精神的ダメージだった。

どうもこの教師、真面目な顔で結構おちゃらけたことを言う性格らしい、ということに勇一はやつと気がついたのだが、既に遅かった。

「結婚式には銀誓館の能力者や教師がエキストラとして参加する」
だの、

「面倒だとは思うが、万が一がないようしっかりカップルとして振る舞ってくれ」

だのと、既に参加が確定したものとして注意事項だか何だか判らないことを言われ、挙げ句に刺されたトドメは、

「特殊空間が開くのは夜中に男女がベッドの上で抱き合った時だ。

まあ、頑張ってくれ。」

などと言われてしまつては、（人間の姿の）夕凧と2ヶ月近く過ごしてきて、多少のことには動じなくなってきた勇一も平静で居られるはずがない。

とってつけたように、

「抱き合うだけでいいからな、それ以上のことはするなよ。お前達はまだ高校生なんだ。」

と最後まで真顔で言われても、正直、困るのである。横でやる気満々の夕凧を見て、勇一は頭が痛くなってくるものだった。

四角四面ではないにせよ、やや堅物とも言える程度には真面目な高校生である彼は、夕凧に好意を抱いてはいるが、それでも高校生らしい慎ましい恋愛を望んでいたのである。もつとも、口の悪い第^{あのセン}三者であれば、今の状況を指して「同棲している時点でそんなの無理」と言うだろうが。

ちなみに今回の作戦について、銀誓館が普通よりも慎重を期しているのは、そのホテルそのもののオーナーが銀誓館と繋がりがあり、依頼の危険度は大したことがないが、失敗だけは絶対に避けたい、という意向が働いているらしい。

「教育的配慮」からか言明はされなかったが、要するにこのホテルも銀誓館の資金源の一部なのかもしれない、と勇一は薄々思ったりもするのだった。

「最後に、1つだけ注意、というより謝らないといけない点があります。」

教師による細かい説明という名の言葉責めが終わったところで、姿勢を正して茜が言う。

「おそらく周囲にリリスも居る影響でしょうが、運命予報に不明瞭な部分があります。件の地縛霊は、ほぼ間違いなく戦闘に慣れていない能力者1人分程度の戦力です。ですので、ある程度の経験を積まれたお2人でかかれば苦戦することはないでしょう。ですが、詳細な攻撃方法までは見えなかったので、事前にお伝えできません。

申し訳ありません。」

その言葉を聞いてうーん、と勇一は悩む。戦力的に問題がないのであれば、そこまで危険ではないようにも思える。が、相手の手札が判らないというのはやはり困る。

もちろん銀誓館の能力者の戦い方を地縛霊が知っているわけではないから、お互いに相手の手札を知らないことは一方的に決して不利になる要因ではない。

だが、それが人外存在との命を賭けた戦いである以上、フェアプレイ精神を発揮するよりも生き残ることを大切にすべきであり、通常の依頼よりも不安定になることは否めない。

それでも、少なくとも彼の中では安請け負いではない、という程度に悩んだ勇一の答えは、

「判りました。まあ、やってみます。」
だった。

自分の命を賭けることの重さに比べれば、結局は安請け負いかもしれない。

それでも、少なくとも戦う前から依頼を受けたことを後悔しない程度の覚悟は勇一の中で纏まっている。先程の夕凧の暴走で断りづらい空気になっている点を差し引いても、彼は明確に引き受けることを決意したのだ。

とはいえ、依頼を受けるにあたって何ら悩みがない、というわけではない。

「そう言ってくれると有り難い。あー 気休めにしかならないかもしれないが、厳しいと思ったら逃げてくれ。地縛霊のほうは取り逃がしたところで、面倒なだけで再度何とかする方法が無い訳じゃないからな。」

という教師の声を聞きながら、勇一は、本当に大丈夫なのだろうか、という心配をまだ心の中で燻らせていることを自覚していた。戦闘についてもなのだが、それ以上に地縛霊の特殊空間に入るまでの間が、だ。

なにしろ女性関係にもゴースト退治にも、まだ完全に慣れたとは言えない勇一である。そんな問題は命を賭することに比べれば大したことではない、と冷静に思えるようになるのはもう少し先のことだろう。

作戦決行は来週の日曜日とのことで、10日ほど先、新学期が始まった直後になる。ちなみにリリース退治のチームはこれから編成するらしい。

それまでに勇一は、できる限りの準備はしておくことにした。1つは今までのような模擬戦。もう1つはゴースト退治の経験豊富な相手の話を聞くことだった。

それに関しては先生が、今日が夏休みということもあって、生徒

はあまり来ていないため、即座に誰かと会う、ということは望めないが、数日中には先達を呼んでくれることを約束してくれた。

生徒指導室を辞して今度こそ帰路についたわけだが、その道中、夕風はかなりはしゃいでいた。一方の勇一はというと、距離感をどうしていいか判らないため絶賛混乱中である。

勇一にとって夕風はパートナーだ。もちろんパートナーと言っても色々あるが、少なくとも同居人であり、戦闘の相手であることは確定だし、恋人関係であることもほぼ間違いない、と思っている。

だが、結婚はというと話は別だ。平凡な高校生にとって、結婚などというのは短く見積もっても数年先のことであり、まだ実感できるような話ではなかったのだ。

ましてや自分は能力者という、多少かわったポジションにいるわけで、人並みの人生が送れるのかどうかは先行き不透明とも言える。いや、そもそも今回必要なのはあくまで「フリ」であって、本当に結婚するわけではない。

ドライな性格だったり、あるいは自分にとって無関係の相手であれば、そう割り切っていられたかもしれないが、あいにく、勇一の性格、夕風との関係、どちらをとってもそれは無理な相談だった。そして、結局、どうしても「結婚」ということについて意識してしまう。ついでに言えば、冷静に考えようとしても夕風がそれを（結果的に）許してくれないのはいつものことだ。

「ねえ、勇一様。ドレス選びはいつ行きます？」

学校に任せておいていい気もするけどな。（と、口には出せない）

「引き出物は何にしましょうか。いくら演技とはいえ、式場の人と一緒に手配することになりますよね。」

学校に任せちゃ駄目なんだろうか。（と、口には出せない）
「そつえば、指輪どうしましょう。給料3ヶ月分　って、私達

本当はまだ学生ですっ、どうでしょう!？」

学校が何とかしてくれるだろう、流石に。(と、口には出せない)

「子供は何人ぐらいにします?私、2人ぐらいがいいかなって。」

「おい待て、それはいくらなんでも違うだろうっ!」

ツツコミはできる程度に余裕があることが確認できただけでも、勇一は進歩していたと言って良いだろう。喜ぶべきかという、少なくとも彼にとっては首を傾げざるをえないが。

材料を買って帰宅し、夕風が夕食を作っている間に、彼は帰り際に教師から渡された、かなりの厚みと大きさの紙封筒を開く。今回の「作戦」に必要なものが入っている、とのことだった。

本来なら夕食後にでも、落ち着いてからでも夕風と一緒に見るべきだろうが、色々と怖いので先に目を通しておくことにしたのだ。

真っ先に封筒から出てきたのは結婚式場のパンフレットと、担当者の名刺だった。裏に鉛筆で「この担当者に話は通してあるので連絡するように」と書かれている。

次に出てきたのが、「経費はきちんと領収書を添えて提出すること」と書かれた紙とセットで札束が入った茶封筒だった。

今回の作戦(というかターゲットとなる地縛霊の)性質上、実際に結婚式を挙げなければならず、その費用が必要なのは理屈では判るが、かなりの厚みがある札束というのは健全な高校生にとっては色々と精神的なプレッシャーになる。金額の確認などは後にして、とりあえず中身を確認することを急ぐ。

その次に出てきたのは、何枚かの紙がクリップで留められたものだった。

一番上の紙には、招待状を送るべき相手の間柄と名前、住所た。客の役をやってくれる教師なのだろう。全部で22人。結婚式にしては規模は小さめだろうか。いや、大きくても困るのだが。

紙をめくると、2枚目には何やら男女1人ずつの、個人プロフィール

ールが書かれていた。

男性は「笹川竜一」ささがわ・りゅういち19歳、高校卒業後に親が経営する工場で働いている。女性は「上村友那」かみむら・ゆうな18歳、大学生らしい。要するに、そういう人物を演じる、ということだ。その他、細々したディティールが書かれているが、どちらも「平凡」そのものだった。

名前が本名に近づけてあるのは、結局俺たちがやるのが前提だったんだなあ、ということに気がついてしまうが、今更どうこう言っても仕方がないことだ。

そして最後の1枚の紙に、当日の作戦が印刷されていた。

まず、リリス退治班（8人）の誰かがリリスと接触し、仲良くなる。この時点でリリスの「能力者を感知する能力」は無力化される。その後、接触した能力者はできるだけ時間を引き延ばしつつ、タッピングを図って他のメンバーと合流し、リリスを討つ。場所はスツッフ用のシーツ置き場の部屋やリリスが宿泊している部屋など、いくつかの候補が書かれている。

そして、宿泊客リリスがホテル内から消えたことに誰かが気がつく前に、地縛霊退治を終わらせる。警察による事情聴取に巻き込まれると身分偽装がばれる可能性があるので、騒ぎが起きたら怯えたふりをして逃げてしまうほうがいい、とのことだ。

なるほど、こうやって具体的な作戦を見ると、やや綱渡りなことが判る。リリスを押さえる班は、戦闘力と経験を併せ持つメンバーを集める、と言っていたが、その必要があることが勇一にも理解できた。

ふと気がつけばキッチンから香ばしい香りがしてきていた。そして同時に、夕風の声も聞こえてくる。

「勇一様、ご飯できましたよ。今夜は鰻です、蒲焼きですよ」

そんなものスーパで買ってたっけ？と一瞬考えるが、そもそも自分がうわの空だったことを思い出す。我ながらやや重症かもしれない。

「久しぶりだな、鰻とか食べるの。最後に食べたの実家だったもんなあ。」

「精をつけないといけませんから！」

「　　なんでだよ。」

しまった、言ってしまった。何やってるんだ俺、と瞬時に後悔するがもう遅い。

「だってほら、いくら年齢ごまかすとはいっても20歳以上、^{はたち}というの難しいですし　　できちゃった結婚のほうがりアリティありませんか？」

「いやまて、本当にやる気じゃないだろうな！？」

「　　駄目ですか？」

期待するような上目遣いで見てくる。あざとい。実にあざとい。とはいえ、多少のことなら許容してしまう（というか押し流されてしまふ）勇一でも、流石に譲れないものはある。むしろ譲っちゃいけない、健全な高校生として。

「駄目だ！」

そもそも2週間もないのに無理だろう、という失言になりかねないツツコミをしかけたが、とつさに飲み込む。変な言質を与えることになりかねない。

「あう　　でも、そういう設定だけなら　　いいですよね？」

一瞬、勢いで「駄目だ」と即答しそうになる勇一だったが、確かに夕風言うことには一理あった。そもそも自分に演技力なんてものがあるのか、と考えると、人並み程度にはあるかもしれないが、少なくとも自信がある程ではない。

そして、別に結婚式場の人を騙すような詐欺をするわけではないから、多少のことは相手も気にしないかもしれないが、それでも外見的な若さから怪しまれるのは避けたいところだ。

であれば、いわゆる「できちゃった婚」を演じるのは、ありがちなケースとして相手が認識してくれるだろうし、デリケートな親子関係をちらつかせれば、あまり色々探られない方策としては名案に

思えた。その案が出てきた経緯はこの際置いておくしかない。

「まあ　そうだなあ、それは確かに。でも、あくまで設定だけだぞ？　いいか、設定だけだぞ？」

大切なことなので2回言いました。

「はいっ、設定だけですな！　判りました！　　っう　。」

嬉しそうに反応したと思った夕凧が、突然口を押さえて俯く。こころなしか、少しふらついているようだ。

もしかして病気ではないか、という常識的な話とは違うベクトルの嫌な予感しかないが、一応、苦しそうなので黙って見ているわけにもいかない。

「おい、夕凧、大丈夫か？」

5%ぐらいの心配と95%ぐらいの義務感で、夕凧を支えてやりながら確認する。

「ええ、大丈夫、です。ちょっとつわりが酷くて　。」

　　やっぱりかよ。とは、口には出さない。

「そうか、それはまずいな　。少し横になっていたほうが良くないか？　大丈夫、夕食は俺が全部食べておくから。」

「　　鰻、私も食べますっ。」

あっさり復活した。

色々と慣らされてきた勇一である。流石に夕凧からの「この手のお約束をかわす方法は覚えてきてはいるのだ。傍目にはいちゃついているようにしか見えないわけで、人、それをバカップルと言うのだが。

夕食を済ませ、あらためて夕凧と資料を確認する。札束は100万円あった。こんなに高校生に渡してしまっているのか、銀誓館学園。準備なども含めて、もうちょっと教師が介入して欲しい気もするが、考えてみたらそれはそれで端から見たら不気味だ。

もちろん、親のフリをしてもらえば良いのかもしれないが、教師が相手だと、それはそれで別の意味で疲れそうな気がする。

つまるところ、地縛霊の特殊空間を開くため、とは違う理由で、結婚式の準備をするところから自分達が演じるしかないのだ。チクシヨウ。

「今夜からムードを作るために一緒に寝ませんか？いえ、本番じゃなく、あくまで添い寝だけですから大丈夫ですっ！」

という、全然大丈夫じゃない夕凧の提案をできるだけ丁寧かつ厳格に断りつつ、既に地縛霊と戦うこととは別の意味での不安をどんどん膨らませながら、夏の夜は更けていくのだった。

All Set?

9月1日。

世間一般の認識では、おおかた「関東大震災があつたため、防災訓練がある日」か、「学生の2学期が始まる日」だろう。後者に関しては、実際には学校によって多少前後したりもするが、銀誓館学園はご多分に漏れず今日が始業式だった。

そして、勇一は精神的にやや切迫していた。何しろゴースト退治を執行するのが3日後まで迫っているのである。

日程的にギリギリ大丈夫だったのと、始業式なので流石に出席することにしたが、明日（金曜日）は学校を休んで準備にかかりきりになる予定だ。ゴースト退治というよりは結婚式の準備、だが、厳密に言えば、今回挙がつている「結婚式を挙げたカップルが」という条件はあいまいな点も多い。

運命予報士が認識したのはあくまで「そういうカップルが襲われた」という事実なので、正確な判定基準は判らないのだ。もしかしたら夜中にこっそり、結婚式のまねことをやるだけでもいいのかもしれない、という可能性もある。

だが、場所やリリス退治との兼ね合いを考えると、そう何度も試してみるわけにもいかなかったため、万全を期して、ということになった結果、かなり本格的に結婚式をやる、という方向に話は向かっていった。

決行予定は日曜日で、しかもいわゆる「六曜」では友引にあたる日だった為、結婚式を開催する日程としては本来、かなり需要が高い。ましてや彼らが結婚式の話をして式場に持ち込んだのは挙式の半月前、という非常識ぶりである。

そんな急な日取りだったため、そもそも式場が取れないのではな
いか、と心配していたのだが、何故か予定日にあっさり取れてしま

った。何らかの力（世界結界的な何かかもしれないし、或いは銀誓館の政治的な圧力かもしれない）が働いた可能性は高いが、深く考えても仕方がないので、勇一は考えないことにしていた。

結婚式場で働くプランナーの人も最初は大いに訝しんでいたが、途中から乱入してきた夕風の父親（の役を受け持った教師）が、「こんな若造と、できちゃった結婚なんか認めたくない！しかし可愛い娘は幸せにしてやりたいんだ、どうすればいいっ！」

と、プランナーに詰め寄ったり八つ当たりしてくれたおかげで、先方は追及する余裕すら失ってしまったようだ。

そういうやりとりを見ていると、勇一にとって、ノリノリな夕風をはじめとしてこの件に関わってる人、ほぼ全員がかなり適材適所に思えてくるのだ。要するに自分以外は。

参加者への招待状はほとんど返ってきている。衣装選びも食事選びも終わり、引き出物の準備もできた。色々あったが指輪の準備もできた。

この辺、ある程度余裕があれば「いい勉強になった」とは思えるのかもしれないが、残念ながら勇一にとってそこまでの余裕はないのは言うまでもないだろう。

偽名にはやや慣れていない部分もあるが、本名に近いからまあ、何とかなる。そしてリハ―サルはいよいよ、明日の午後だ。あまり複雑な手順はないし、まあ、大丈夫だろう。

段取りとして心配することはあまり無い。そもそも多少の失敗はこの際気にしても仕方がない。無事に結婚式を行った、という事実ができればそれでいいのだ。地縛霊が納得してくれる程度の。

一方で、戦闘に関する段取りも、完璧とは言わないにせよ問題なく進んでいた。リリスを攻撃するメンバーも決定し、二度ほどはミ―ティングに参加している。

戦場そのものは、同じ建物内とはいえかなり離れた場所になるが、時間に関する認識をあわせたりする必要はあるからだ。少なくとも、

勇一と夕風がホテルにチェックインする5時より前には誰かがリリスと接触しなければならない。

ちなみに、対リリスのほうの班は、年齢でいえば小学生から現在は大学に通っている卒業生まで、そして性別も国籍もバラバラ、という銀誓館らしいメンバーの8人だった。最年長である大学生の男性がリリスに接触する囃役を受け持つらしい。

全員が場数をこなした猛者ということで、あちらの心配は必要ないだろう。そもそもルーキーである勇一が何か心配したところで、どうにかなるわけでもない。

むしろ、リリス班の方のメンバーから、特殊空間での戦闘について、いくつかアドバイスを貰えたのは勇一にとって、思わぬ成果だった。

それ以外にも、地下室でやっていた模擬戦を、夕風との1対1での勝負から、夕風と組んで先輩能力者を相手に2対1で戦う形式に切り替えることで、コンビネーションの練習としていた。

いままで夕風と何度も手合わせをしてきた経験から、お互いの技量や戦闘の癖などは把握できている。それ故、戦闘中のコンビネーションに関しては、先輩も驚くほど安定してきている。

怖くない、とは言わないが、少なくとも今回、地縛霊と戦うことへの不安はかなり軽減されていた、と言えるだろう。

むしろ過度な恐怖や、あるいは自分への過信があるわけでもなく、緊張感を失ったわけでもないのが、勇一自身は意識していないが、ベストコンディションにかなり近い状態だった。

そんな風にここ数日のことをぼんやりと思い返していたら、いつのまにか始業式は終わっていた。流石に今日から授業があるわけではなく、あとは教室の清掃とホームルームが終われば終わりだ。

もしかして夏休み中に学校に出入りしていたことや、あるいは最悪、結婚式場に出入りしていたのを知人に見られていなかっただろ

うか、という懸念もあったが、どうやらそれは杞憂に終わったようで、ホームルームの合間にも、誰もそのことについて触れてはなかった。

強いて言えば、以前、夕凧と一緒に登校したのを目撃したクラスメートの三池・辰也に、

「で、例のカノジョとはどうなんだよ。もう一緒に寝たか？」

などと微妙な下ネタを振られたりした程度だ。こんなのは足を蹴飛ばして無視しておくことにすればいい。

11時には、ホームルームと掃除が終わり、下校となる。

いわゆる帰宅部の面々と顔を合わせないように15分ほど図書室で時間を潰してから、夕凧と校門の近くで待ち合わせしよう、というメールを送ることにした。

すぐに返事が返ってきて、5分後に校門で、ということになった。だが、ここで思わぬハプニングに出会ってしまった。

あまり懇意でもないが、普段、それなりに気にかけてくれている数学の教師とばったり会ってしまい、勇一は呼び止められたのだ。

「悪いけど、少し手伝って欲しいことがあるんだ。すまないね。」

手伝いの内容とは、ページごとに大量に印刷された教材用のプリントを纏めてホッチキスで止める、という作業だった。確かに教師1人でやるには厳しい量である。

「あ、はい」

夕凧と約束をした手前、本当は断りたいところだが、流石に理由を言うわけにもいかず、かといって黙って断るのは無理がある。急いで終わらせて帰るほうが得策だろう、と勇一は判断した。

が、なかなか骨が折れる作業である。何しろプリントの枚数は1セットが10枚以上、それをきれいに重ねて端をホッチキスで止めるのだが、全部で6クラス分もあるのだ。教師と分担しても、1人100部ぐらいは作ることになる。

結局、かなり時間がかかってしまい、作業が終わるやいなや、教

師の感謝の言葉を背中に受けながら勇一は急いで校門に向かった。携帯電話を確認したが、夕凧からのメールは入っていない。しかし、既に約束の時間からは1時間近く過ぎている。

駆け足で玄関を出て、周囲を見渡す勇一。校門の外のほうを見ながら夕凧が立っているのが見えた。待っていてくれたのか、という軽い驚きと、申し訳なさが胸を軽く突き刺す。

「ごめん、夕凧。ちょっと先生に捕まっちゃってさ。待たせたか？」
「あ、勇一様。いえいえ、大丈夫です、今来たところですから。」
はっと振り返りつつ笑いかけてくる夕凧。だが、その直前、寂しそうな表情をしていたことに、その手の方面ではやや鈍感な勇一も気がつく。

とはいえ、その表情に気がついてはいいても、どうしていいかは判らない。もう少しお互いの年齢が上であれば、抱きしめる、或いはキスする等も考えられるだろうが、流石に高校生が校門の前でやるのは色々と無理がある。

もうちょっときちんと話したほうが良いのかとも思ったが、夕凧は普段通り手を組んで帰りだそうとする。なんとなく後味が悪い感じを胸に残しつつ、勇一はそれに従うことにした。

帰り道の江ノ電の中で、勇一はふと考える。

少し時間をかけてしまったとはいえ、まだ昼の12時前である。実のところ、今日は予定がないのだ。学校で模擬戦をやるうと思っただが練習相手が見つからず、結婚式の準備は明日・明後日に仕上げをする予定だ。つまり、今日、やらなければいけないことが特にないのだ。

そう考えると、ここ数日の忙しさもあり、少しリフレッシュしようか、という気になる。普段であれば学校に行った日にリフレッシュなど思いもよらないことだが。

しかし、具体的に何をするか、と考えるとこれまた、あまりアイデアが思いつかないのだ。

勇一は部活などをやっているわけではないが、いつぞやリリースに襲われた事件の後は、戦闘訓練やゴーストとの戦い方の研究などを積極的にするようになっていた。

なので、時間の使い方という点においては、積極的に部活に打ち込んでいる生徒とあまりかわりがないとも言える。つまり、遊ぶ、という時間をあまりとっていないのだ。

元々、高校に入った時に大きく変わった生活に慣れきっていないかった点もあわせると、実は彼は最近、まとまったリフレッシュというのを経験していなかった。

もちろん、夜、宿題や予習を済ませた後にゲームをすることはある。

休日であれば家で休んだりするし、少し買い物やゲームセンターに行ったりはする。が、せいぜいその程度だ。つまり、そういった「日常生活」以外に何もしていなかったことに気がついたのだ。

そういうわけで、何をしようかと江ノ電の速度にあわせてゆくり流れていく窓の景色を見ながら考える。

否応無しに目に入ってくる海を見てみると、ふと、1つのことに思い当たった。

そういえば。鎌倉に来てから、あまり見学してなかったよなあ。有名な場所なのに。

「なあ、夕風。」

「はい？」

「昼食終わったら、少し散歩行かないか。その　リフレッシュも兼ねて。」

「いいですね！行きましょう！でも、どこに行きますか？」

「あんまり考えてないんだ　。鎌倉の景色を見て回るのに、どこかい場所ないかな？」

「そうですね　あ、あの辺ならいいかも。そんなに遠くないで

すし、散歩に良さそうな場所、私、知ってます！」

「じゃ、後で行ってみようか。」

「はいっ！」

そして2時間ほど後。

「いつも海ばかり見てたけど、こんな場所もあったんだなあ。」

通学は江ノ電で、買い物などの遠出は鎌倉駅からJRで移動して、という生活をしてた勇一にとって、由比ヶ浜の景色は何度も見ていたが、実は山側の景色は新鮮だった。

もちろん周囲を見渡せば山に囲まれている地形なので、その存在自体は認識している。だが、あまり生活に縁がなかったのだ。

私服に着替え、軽い昼食をとった彼らは、鎌倉駅から少し離れた住宅地を歩いてた。夏の日差しがやや厳しいが、意外と風が吹いているので熱すぎる、という程ではない。

緑が多い、閑静な住宅地の中を2人でのんびりと歩いていく。

勇一が普段生活しているアパートの周辺は、やや現代的なマンションやビルも散見されるのだが、この辺は古い町並みが残っていて、やや歴史ある街の高級住宅地、という趣きだ。

少し歩くと、トンネルに行き当たる。中はかなり暗いが。

「このトンネル、佐助隧道すいどうって言うんですよ。入り口のあたりの木が、紅葉の頃に来ると綺麗なんです。」

「そうなんか。なんか新鮮だなあ。」

「新鮮　ですか？」

「ほら、俺が前に住んだのは平地だったからさ。鉄道の下とかのトンネルはあつたけど、山をくり抜いた本物のトンネルってあんまり見なかったんだ。」

「なるほど　そういうものなのですねえ。もう3年ぐらい生活してるから、あまり気にしたこと、なかったです。」

「3年って　その、前はこの辺に住んでいたの？」

今更だが、夕凧が蜘蛛童だった頃の飼い主についてはあまり知識がないことを再認識することになる。

何やらアニメやゲームに詳しいとか、メイド喫茶で働いている女性らしい、等の断片的な知識はあるが、どんな人なのか、という全体像はまったく言っていない程、見えていないのだ。

「そうですね　長谷のほうなので、ここからは少し離れていますが。でも、よく鎌倉駅から家まで歩いて帰る時はここを通りました。」

「なるほど。」

「どんな人だったか気になります？」

どんな人だったのだろう、と聞くべきかどうか一瞬悩む勇一だが、それを見透かされたような言葉に先手を打たれて、一瞬ドキッとする。

勇一たちは既に、かなり暗いトンネルの中ほどを歩いていたので、動揺が表情に出たかもしれないが、おそらく顔を見られていないのが勇一にとって唯一の幸이었다。とはいえ、声の動揺までは隠せないのだが。

「う、うん、まあ、そうだなあ。」

どんな人と一緒に居ると、今の夕凧みたいになるんだか知りたいよ。

とは、口が裂けても言えない。いや、元々、それを言ってしまうほど勇一は口が悪いわけではないのだが。それでも、頭の中でそう思うことは何度かはあるのだ。悪意という程ではないが、呆れと好奇心が混ざったような感情だろうか。

「そうですね　。外見は私と似てるって言われますよ？むしろ、私が勝手に似ちゃっただけだと思いますけど。」

「そういうものなのか？」

「最初から勇一様と一緒に居たら、勇一様と同じような外見に育ったかもしれませんね、私。」

それはそれで少し怖いぞ、という言葉は頭の中にしまっておく。とはいえ、外見的に似ている、というのはじめて聞いた。

能力者やゴースト関連の知識を最近、積極的に吸収するようになった勇一だが、蜘蛛童が土蜘蛛に羽化するときに、今まで長く付き添った人間の外見に似るという話は、噂ですら聞いたことがなかった。

もし、本当にそんなことがあるのなら、何百何千もの蜘蛛童や、それを使役する能力者が居る銀誓館で話題にならないはずがない。そう考えると、今の夕凧の外見が以前の飼い主に似ていること自体は事実なのだろうが、おそらく偶然の類なのだろう。

まあ、夕凧が自分で似た、と言ってるのだから、そういうことにしておけばいいのだが。

そういえば、という感じで、あらためて周囲を見渡す。真っ暗とはいかないまでも、かなり暗く、それでいて陰湿な感じや怖さはない、不思議な印象を受けるトンネルだ。

「その　少し抜けたところもありましたけど、しっかりした土蜘蛛の巫女の方でした。私から見れば先輩になる、とある土蜘蛛の方にお仕えしてましたけど　ちよつと、羨ましかったです。」

「羨ましかったです？」

「その、何というか　信賴関係、って言うのでしょうか。主従関係なんだけど、あまり気張らずに仲良くしている、みたいな。」

「ああ、そうなのか　なんとなく判るような気はするな。」

「だから、最初に勇一様に飼われることになった時、少し心配だったんです。私達みたいな使役ゴースト　いえ、今はもう私は違いますけど　使役ゴーストを、駒としてしか見ない人も居るらしい、とは聞いていたので。」

「　ああ。」

内心、少しチクリと痛む部分はあった。別に粗雑に扱った覚えはないし、捨て駒と思っただけでもない。

だが、こうやって色々考えたり、悩んだりできる存在だ、という

意識があつたかといえ、そこまで考えていなかった、というのが正直なところだ。

「そうだよなあ。ごめん、あんまり考えたこともなかったよ。何と
いうか、こういうの。」

「あ、でも、気にしないでくださいね。こうやって羽化する前は、
今ほど色々考えられたわけじゃないんです。そこら辺の蜘蛛よりは
賢かったと思いますけど、それでも、何でも判ったわけじゃないで
すから。」

「そうなのか？ならいいけど。」

トンネルの出口にかなり近づいているとはいえ、まだ薄暗い。ふ
と横を見たが、勇一は夕凧の表情を見ることはできなかった。

2時間ほど、ぶらぶらと歩いたり、近くの神社を覗いたりしてみ
たところで、流石に暑さで体力を削がれてきた気がする。夕凧も同
じらしく、近くのスーパーで夕食の材料だけ買って家に帰ることにな
った。

家に帰ると、学校から郵送で、出席する教師や先輩の写真が届い
ていた。親や親戚、職場の先輩の顔を知らないのはおかしいから、
顔合わせをしたい、という話をしていただけけれども、スケジュー
ルがあわなかった結果こうなっただけらしい。

今回のゴースト退治の面倒を見てくれている教師や、協力してく
れる教師が普段居るのが勇一が通うキャンパスとは別なので、資料
が郵送で送られてくるのは仕方がないのだ。

こればかりは複数のキャンパスにまたがる巨大学園、という性質
上、仕方がないことだろう。

そんな資料と睨めっこしているうちに、夕食ができていた。

「夕食、できましたよっ。今日は精がつくように 鶏肉をカシュー
ナッツとニンニクで炒めてみましたっ。」

なるほど、良い匂いがしてくる。でも精がつくって何だ、精がつ
くって。

夕食を済ませ、明日の段取りを確認する。明日はいよいよ、結婚式のリハーサルだ。

たとえ演技であろうと何だろうと、本番の結婚式が間近に迫ってきていることを再認識せざるを得ない。ましてや、当事者は自分達なのである。緊張するな、というほうが無理がある。

とはいえ、あまり緊張してばかりもいられない。むしろ緊張していることを夕風知られたくない、という気持ちが勇一にはあった。それが何故だかは自分でも判らないが。

だから、夕風の、

「明日はいよいよリハーサルですねっ。楽しみですっ。」
という言葉に、つい動揺してしまう。

「そういえば、私達って、できちゃった婚なんですよねぇ？」

「そ、それは設定だけだろ！そういう！」

「1回ぐらい、本当にやってみたりも駄目ですか？」

「いや、だからさ、それは駄目だってば。俺たちはまだ学生だし、今回はそういうのじゃないだろ。」

「そうですか。そうですよね。」

その言葉の後、夕風は口を閉じてしまう。

普段であれば別のこと、たとえば「それじゃあ一緒にお風呂にでもー」などと言い出すことが多く、既に慣れてきている勇一はその心の準備をしたが、それは空振りに終わった。

そして、やや長い沈黙が訪れる。そして夕風が、意を決したように、再度、口を開いた。

「その 勇一さん。今夜だけでいいから、やっぱり、添い寝、してくれませんか？その、勇一さんの嫌がるような 変なことはありませんから。」

まだ言うか、と即答で断ろうと考えた勇一だが、口を開く直前に頭の中に何か違和感がよぎった。理由のない直感である。

具体的にどこが違う、と言葉にできるような違和感ではないが、普段の夕凧とは何かが違う気がするのだ。

強いて言うならば。自分が拒否したことを、夕凧が間をおかずに2度も求めてきたことは初めてだった気がする。だが、それだけが違和感の原因とは、勇一には到底思えなかった。

「。。。」

あえて黙ることで、続きを促す。

「えっと、ほら。何でしたっけ、何かの本に書いてあったんです。男性は女性と一緒に寝たかどうかで、声のかけ方が違うから、とか。」

ここにきて、やっと勇一は違和感の正体に気がついた。夕凧の言うことに説得力がないのだ。嘘についている感じではないが、どこか空虚な印象を受ける。

言い換えれば、夕凧自身が自分の言っていることに納得していないような印象、と言うべきだろうか。

「あの、あの。本当に、その、エッチなことはしないでいいですから。ほら、何ていうんでしたっけ、ああ、役作りです、役作り！」

もはや明確に夕凧の様子がおかしいのは理解できていた。というより、どんどん酷くなっているようにも思える。だが、勇一にはそれが何故なのかは、まだ判らなかった。

「なあ 夕凧。何か、他のこと考えてないか？」

「。。。」

今度は夕凧が黙ってしまった。それだけでなく、俯いてしまっている。

「その 俺はさ、夕凧が嘘をついている気はしないんだ。でも、何か他に言いたいこととか、あるんじゃないかな、って思ってる。」

「あの。」

夕凧の声は少し泣きそうな感じにも聞こえる。やはり、何かあるのだ。

「勇一様は、私のこと　どう思ってますか？」

突然こんなことを聞かれれば、うろたえるのは当たり前だろう。とはいえ、別に疚しい何かを抱えていたわけではない勇一は、恥ずかしいとは思いつつも、率直に言葉を返した。

「改めて言うのはやっぱりちよつと恥ずかしいけど、うん、好きだよ　？」

「それは、戦闘の、パートナーとしてでしょうか。それとも。」

「能力者とか戦闘とか、そういうのは関係ないさ。俺は、夕風が、好きだ。」

先程の言葉より、はっきりとした口調で答える。だが、夕風はその答えを求めていたわけではないようだ。

「。。。」

そして、いまいち夕風の真意が掴めないでいた勇一は、沈黙の後に紡がれた次の言葉で、軽く殴られたような衝撃を受けた。

「勇一様は、私が最初にこの姿になった時、私は蜘蛛だ、人間じゃない、っておっしゃってましたよね　。確かに私は、もう蜘蛛童ではないですけど、でも、でも、たぶん人間じゃないです。」

勇一は何か言おうとするが、言葉にできずに、短い溜息だけが漏れただけだった。

「。。。」

「少なくとも、普通の人間じゃないです。まだ判らないことも、判つてないことも、沢山あります。それでも、好きでいてくれますか？私、人間じゃないですけど、いいですか　？」

ああ、夕風はこんなことで悩んでいたのか。

いや、こんなこと、と軽く言える話でないことは、勇一も理解していた。何しろ彼自身、能力者として覚醒した直後はいろいろ悩んだりもしたのだ。

そして、その答えを既に得ていたからこそ、勇一はこう言った。

真面目に答えた方がいいか、とも思ったが、あえて少しおどけたような言い方をする。

「なあ、この前の模擬戦でさ、お前、俺の脇腹に思いっきり日本刀突き立てたよな。」

「その、もしかして　それで、私のこと嫌になっちゃいました？」

「違うよ。その数日前は確か右腕を抉ったわけ？あれも結構痛かったんだ。」

「う。」

「普通の人間ならとくに何度も死んでるけど、俺、この通りピンピンしてるよ。」

「！」

夕凧の目がびっくりしたように見開かれる。

はっと息を呑むのが、聞こえる。

「俺だって、世間一般でいう常識的な人間、ってヤツからはとくに飛び出してるんだ。確かに夕凧は蜘蛛だったし、自分のことを化け物と思ってるのが間違いだ、って俺は言い切れない。でも、俺も夕凧と同じ側なんだよ。それなのに嫌ったりなんてする理由、ないぜ？」

相変わらず少しおどけて頭をかきながら言っではいるが、勇一の目は真剣だ。

「はい　はい　！」

夕凧が伏せていた顔をあげる。潤んだ目からは、涙が既に溢れ出ている。

「ごめん、確かに俺は、　その、何て言うんだろう、あまり夕凧のやりたいこと全部を受け入れてやれなかったけどさ、それはほら、身体は化け物でも、生活は人間のままでいたかったからなんだ。でも、夕凧だって見た目はもう立派な人間だし、それに可愛い女の子だ。だから、女の子として生活するべきだ、って思ってたんだ。それが押しつけだったなら謝るよ。でも　」

「そんなことないですつ、私、私が判ってなかっただけで　ごめんなさい、ごめんなさい。」

完全に泣き出した夕凧の肩を、勇一はそつと抱きしめる。その暖かさは、間違いなく人間のそれだった。

Engage Supernatural Phenomenon (前書き)

何やらバタバタしていて、やや書くのに時間がかかってしまいました。

……その割に内容がアレなのはご容赦ください。アレって何だ。

取材の為に結婚式場行ってきましたよ！

ええ趣味ですとも！SS書いてること口実に遊んできただけですとも！

ウエディングドレス着るのも体験できたので良しとしますけどね！

「どう、ですか？竜一さん。」

その声に振り向いた勇一（今は偽名で、笹川・竜一と名乗っている）は、誰がどんな服装でそこに居るかは想像していたにも関わらず、思わず息を吞まずにはいらなかった。

そこに立っていたのは、ウェディングドレスに身を包んだ夕風（同じく、今は上村・友那と名乗っている）だった。

夕風が着ているのは、オフショルダーの上半身に、ウエストのあたりから直線的に裾が広がったデザインのドレスだ。細かくあしらわれた刺繍は、色つきのドレスであればしつこく感じるかもしれないが、白一色のドレスにあっては適度な装飾と言えるだろう。

様々なデザインのものが普及してきている最近のウェディングドレスとしては平凡なデザインと言えなくもないが、やや開いた胸元や肩が夕風の白い肌とあっていて、適度な大人っぽさと清楚な印象を醸し出している。

ロングストレートの髪型にしている普段と違って、アップにした髪の上からベールを被っているのも、勇一には新鮮に映った。

「……あ、ああ……。」

しどろもどろになる勇一の顔を見て、夕風が悪戯っぽく微笑む。

「惚れ直しました？」

「そう、だな……。」

それは勇一にとって、演技でも何でもなく本心だった。惚れている、という点については、冷静な状態であれば彼は積極的に認めようとは思えないが、やはり事実だ。

要するに、内心で自分をごまかせるほど器用でもなかったし、自分の中での答えは出ているのだ。

とはいえ、別に夕風のことを拒む意図は無いにせよ、結婚するという意思について言えば、演技であり、あくまで依頼のため、と割

り切ろうとしていた。健全かつ真面目な高校生としては当然の判断なのだが。

だが、なかなか思うようにはいかないもので、ペースを崩されている感是否めない。せめてもの救いは、周囲の何も知らない人から見れば、単に「結婚式で緊張してるんだな」と思われている点、だろうか。

その点、むしろ夕凧のほうが、お淑やかでしっかりした大学生ぐらいの女性という役どころを、そつなくこなしているように感じる。言葉遣いや話し方も、いつもより落ち着いた感じだ。この話し方は今までも打ち合わせの時などに聴いていたので、今となつてはそこまでの違和感を感じないが、最初は少し不思議な気分を感じたものだ。

「その……私、嬉しいんです……。」

夕凧の目尻から頬の端を通つて、一筋の涙が落ちる。あわててハンカチを取り出して軽く拭いてやる勇一。

さりげなく化粧が崩れないよう上手に泣いているあたり、演技であることは判るが、それにしても凄いな、と思わずには居られない。むしろ、それを演技だと見抜けるようになったあたり、勇一も（彼に言わせれば「無駄に」とつけるだろうが）鍛えられてきている。

「ちよつと、父と母と話してきます、ね。」

夕凧が微笑む。むろん、どちらも本物の両親ではなく銀誓館学園の教師が扮しているのだが、確かにこういった場ではそれが自然なのかもしれない。テレビドラマか何かでそういったシーンを見た記憶は勇一にもあった。

「ああ、うん……。」

自分も父親（役の教師）とそれらしい話をしてきた方がいいだろう、という気がした。ちなみに勇一のほうは、幼い頃に母親を亡くしたため、父親が男手1つで育ててくれたことになっている。単にスケジュール等に問題がなく、適任な教師が居なかったから、らしいが。

ちなみに先程、改めて親同士を紹介しあったが、如何せん「できちゃった婚」という設定故にややギスギスしていたのもあり、勇一としては父親せんせいに会いに行くのに、やや気が重かったのだ。皆、悪ノリしすぎだ、という意味で。

「最初に話を聞いた時は冷や汗だったけど、いい娘じゃねえか！大切にしろよ。大丈夫、何かあったらちよつとぐらいは助けてやるさ！」

豪快に笑う父親せんせいにつられるように、つい苦笑いをしてしまう勇一だった。人間、追い詰められると笑うものだ、というのは誰の言だったか。客観的に見れば誰も追い詰めてはいないのだが、彼にとつては色々心穏やかでないのは仕方ないだろう。

「ただいまから、笹川竜一様と、上村友那様の結婚式を開始します。」

「

やや事務的ではあるが、朗らかな声で結婚式場の職員が告げる。

既に勇一は 聖壇の前に待機している。

「ゴーストの討伐をすることは覚悟してたけど、まさか初めての討伐がこんな形になるとはなあ……。」

勇一は、あえて平静を保つために、顔には出ないように注意しつつ、意図的に結婚式とは別のことを考えていた。

銀誓館が行うゴースト討伐の依頼の中でも、今回ののはかなりイレギュラーだ、ということは事前に先輩から聞いていたから、こんな事がそう何度も起きるとは思っていない。むしろ最初で最後だろう。それにしても。

人間の運命って何なんだろうなあ、と思う。もちろんアニメや漫画等の熱血主人公なら「運命は自分で切り開くものだ！」と言うだろうし、それは頷ける部分もある。確かに自分はいつぞや、リリース

に襲われた事件の後、「変わった」と思う。

だが、それこそ勇一が能力者として覚醒してしまったことや、使役していたゴーストが人間の姿の来訪者である土蜘蛛として羽化したこと、その後の幾つかの事件なども含めて、自分でどうにかできる範疇ではない事柄も少なからずあるのだ。

「ま、やれる範囲でやっていくしかないよな、どちらにせよ……。」
銀誓館が戦うことになる相手の中には、それこそ勇一のようなルークーキーが何人集まったとしても勝てないような強大な存在も居る。或いは、個々の戦力は兎も角、数千を超えるゴーストと一度に戦うこともある。

そんな場で活躍しよう、とはやはり思わない。自分にそこまでの器がないことは重々承知だし、そんなことは覚悟も技量も持ち合わせた第一線の能力者に任せておけばいい。

「当面は、まあ……自分や夕凧が無事で居られたら、それでいいから。」

結局、そんな感じに落ち着くのである。

荘厳な曲が教会の中に響く。結婚式といえば、というぐらい定番の「結婚行進曲」だ。作曲は確かメンデルスゾーンだったか。高校に入ってから音楽の授業で習った記憶があるが、授業中は、まさかこんな形で聴くことになるとは想像していなかった。

実のところ結婚式というもの自体が初めての勇一であるが、流れてきたのが結婚式であることを強く主張する曲なので、否応なしに実感が高まる。リハーサルで一度聴いているが、やはり空気が違うのだ。

辛うじて、ではあるが「これは演技なんだ」と自分に言い聞かせることができるため、そこまでテンパっているわけではない。とはいえ、やはり緊張を完全に抑え込めるほどではなかった。

「新婦の入場です。」

先程の職員の声が告げる。

勇一の背後から扉が開かれる音、そしてバージンロードをゆつくりと歩く足音がきこえてくる。振り向こうかとも思ったが、あえてゆつたりと構えて待つことにした。何故そう考えたのかはその時も、後になっても結局判らなかったが。

父親に連れられて入ってきた夕風が、勇一の隣に立った。手に持っている白とピンクの花、そして濃い緑の葉で彩られたブーケが白いドレスに映える。ただ、先程と違いベールで顔を覆っているため、表情をはっきりとは見ることはできなかった。

結婚行進曲がフェードアウトし、かわりにオルガンから賛美歌の前奏が流れ始める。

あらかじめ全員に式の進行や、賛美歌の歌詞が印刷されたカードが手渡されているため、宣言や号令があったわけでもないが、皆が賛美歌を歌い出す。この辺のノリは何だか音楽の授業のようで、むしろ違和感がない、という感じすらある。

だが、それが終われば、結局は結婚式という現実には引きずり戻されるのだ。

神父が厳かに結婚式の開始を宣言し、一呼吸置いて、勇一に問いかける。

「新郎、笹川竜一。その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」

軽い深呼吸をして、

「……誓います。」

と答える。これは演技なんだ、そもそも本名じゃないし、という

思いと、それでもやはり夕風は大切にしたい、という気持ち、更に「何考えてるんだ俺は」という照れがせめぎ合う。

そんな葛藤を抱えてやや混乱し、顔が熱くなってきた勇一の耳に、今度は神父が夕風に向かって誓いを促す声が聞こえてくる。

「神父、上村友那。その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います。」

夕風が答える。こちらは勇一の時ほどの間をおかずに即答しているが、しっかりとして軽々さは感じさせない口調だ。言い終わって少し俯いたように見えたが、その理由が判るほど勇一は女心に詳しくはなかった。

勇一の手には、神父から指輪が手渡される。横では夕風が手袋とブーケを介添え役に手渡していた。

こちらを向いた夕風の左手を、勇一は自身の左手でそつと取る。

流石に日常生活で手が触れてしまうことなどは多々あるので、手が触れただけで赤面したり照れたりするようなことはなくなってきたと思う。とはいえ、積極的に手を取ることもあまりないので、こういうシチュエーションになると、やはり照れや恥ずかしさを感じるものだ。

尤も、婚約指輪をはめる時に緊張しないカップル、というのも多くはないだろう。なので、彼らの緊張を何も知らない人が見たところで、別に違和感を感じないに違いない。

夕風の小さい手に、そつと指輪をはめてやる。夕風も流石に緊張しているのか、少し手が震えているのが判る。指輪をはめるのに支障がある程ではないが。

そして今度は、神父から指輪を受け取った夕風が、勇一の手をとって指輪をはめる番だ。考えてみたら、他人に指輪をはめて貰った

ことなど勇一にはなかった。むしろ、アクセサリーの類はあまりつけない勇一にとって、指輪をはめたこと自体がはじめてかもしれない。

無機質でヒヤリとした、それでいて嫌な感じではない指輪の感触が薬指を伝わり、指の付け根に届く。指輪をはめる・はめて貰う間、つい自分の手を見ていた勇一がふと顔を前に向けると、同時に顔をあげた夕凧と顔があった。

そして神父がタイミングをあわせるように、そつと告げた。

「それでは、誓いのキスを」

前に何度か経験しているとはいえ、やはり健全（そして奥手）な高校生の勇一にとっては、人前のキスは精神的に厳しいものがあるが、ここで避けるわけにはいけない。乗りかけた船、というやつだ。できるだけ「それらしく」見えるように、そつと夕凧の腰に左手を回して引き寄せる。夕凧も心得たもので、そつと目を閉じて顔を少し上に向けた。

不思議と、ここまでくると緊張こそ残っているものの、勇一の心にのしかかっていた恥ずかしさは霧消していた。何故だかは判らないが、ごく自然体に関自分の身体が動くことも意識できていた。

そして、夕凧の顔にかかっているベールを右手でそつとどかしつつ、顔を近づけ。

滞りなく結婚式が終わり、ホテルにチェックインしたのは5時ぐらいたった。予定では既に、リリス退治班の囀になるメンバーは接触しているはずで、事実、ホテルのロビーに「今のところ順調」を示す、青いスカーフをして、バカンス中の女性に扮した女子生徒の姿が見える。
なかま

ちなみに彼女が赤いスカーフが「リリスとの接触到失敗、急いで銀誓館に帰れ」というメッセージ、ということになっているのだ。とりあえず部屋に荷物を置いて、少し早めの夕食を取ることにした。結婚式は昼過ぎからだっただが、勇一は主に緊張で、夕風は「少しでも細く見せたいですから！」という理由で昼食を殆どとっていないかったのだ。

何しろ（たとえ演技でも）色々と念願が叶ってしまったようで、夕風はかなり舞い上がっている。もっとも、普段より口数は少ないぐらいで、要するに幸せに浸っている感じだ。

一方の勇一は、冷静ではあるものの、世間的には「新婚カップル」ということになっているのであまり淡々としているわけにもいかない、ということとは理解していた。もちろん周囲に疑いを抱かれてさほど困るわけではないが、何となく不味い気がしたのだ。

そんなわけで、夕食を終わらせると、手持ち無沙汰になってしまふ。時刻はまだ6時過ぎだが、ホテルの中をあまり歩き回るわけにもいかない。何しろリリスが居るのだ。部屋で大人しくしているベきなのだろうか、やることがない。

だが、その悩みは、（勇一にとっては意外なことに）夕風によって救われる形になった。

「あ、そういえば。このホテルの隣で映画やってるんですけど、見に行きませんか？」

結婚式の後に映画、というのも少し奇妙な気はしたが、ホテルからあまり離れるわけでもなく、かといって中に居るわけでもない場所は比較的安全かもしれない。何よりもゴーストと戦うまで、無難に時間を潰すことができるのは有り難かった。

「よし、そうしようか。」

そんなわけで、隣の映画館に向かうことになった。

もっとも、やっていたのがテニスと書かれた謎の球技で高校生が闘うアニメ映画と、どう見てもホラーです、という内容のものだったので、結局はホテルに戻ってきて過ごすことになった。

色々考えた結果、リリースが「獲物」を連れてはこないであろう喫茶店やらゲームセンターやらで時間を潰すことにしたのだ。リリースとて行方不明者（になる犠牲者）と一緒に居られたところを大勢に見られたら、色々とやり辛くなるに違いない、という判断である。

ちなみにこの発想はやや穿ちすぎで、リリースはそこまで色々考える性格ではなかったようだ。が、その時は偶然参加できたディナーショーを囃役の生徒と楽しんでいたため、関係なかったのは幸運な部類だろう。

特に何をしていた、という感じもないままだらだら過ごしていたが、気がつくと何だかんだで時計は9時を回っている。

そろそろ部屋に戻る頃合いか、と思ったところ、夕風も同じ事を考えていたらしく、どちらからともなしに「部屋に戻ろう」という空気になった。

元々、勇一にとっても夕風との関係が「恋人」であることは自覚している。そして全力全開で新婚のフリをしている夕風と一緒に行動していたのだから、やや「甘い」空気になっていたのは否めない。だが、部屋に帰ってきてその度合いは一気に上昇した。当たり前といえば当たり前なのだが。

「その……先にシャワー、浴びてきて貰えますか？」

「ん、ああ、いいよ。」

何だこの甘い空気は、と改めて思ってしまう。が、あまり緊張するわけにもいかない。何しろこの後には命がけの戦いが待っているのだ。かといって、身構えていることを知られるわけにもいかない。正直なところ、もはや勇一にとっては「一世一代の大芝居」と言っているぐらいの感覚だ。とはいえ、何をすればいいか決まっている分、辛うじてボロが出るほどには至っていない。

「あ、勇一さん。」

「ん？」

「ゴムはしなくていいですよ。むしろしない方向でっ。」

「あ、ああ……。」

照れを通り越して、内心で苦笑しつつ「この野郎」と軽く毒づく。別に腹が立っているわけではない。ただ、これから起こること（或いは「やるべきこと」）を考えると、もうちよつと手加減してくれたっていいだろう、と思う。

なにしろ地縛霊が見ているかもしれないので、露骨なツツコミをいれるわけにもいかないのだが、それを判っていて勇一のことを軽くからかっている、ということぐらいは勇一にも判った。

今のところ著しい実害が出たことはないが、たまに夕風はこういう「エッチな」ネタを振ってくるし、流石に勇一も慣れてきてはいた。

むしろ、地縛霊が見ているかもしれないとはいえ、人前ではないので今回のマシな部類とも言える、と無理矢理自分を納得させてスルーすることにする。

客観的に見れば、今の夕風の一言によって、勇一の地縛霊と戦うことによる緊張は少し解けていた、と言えなくもない。むしろ日常の精神状態に近づいたので、コンディションはかなり良くなったと言える。

とはいえ、流石に本人はそこまで気がつかないし、夕風の言もそれを狙ったわけではなく、単に普段の「お茶目」を発動させていただけなのだが。結果的なファインプレー、といったところだろう。

やたら豪華で、でも機能性は普通のシャワーと大差ないホテルの浴室で蛇口を捻る。

9月とはいえ、今年は残暑が厳しい。家に居るときならかなりシャワーの温度は低めにしているが、このホテルは空調がよく効いて

いるのでその必要はなかった。そもそも、蛇口を適当に捻ったらちようど良い温度のお湯がすぐに出てくる便利な仕様だ。

疲労困憊、という程ではないにせよ、今日は疲れたと思う。何しろ結婚式があつたのだから。とはいえ、これから文字通りの「戦闘」が控えていることを考えると、疲れたなどとは言つていられない。

自分が居る場所にリリスや地縛霊が居るのは、銀誓館の能力者側がある程度状況をコントロールして「襲われる」タイミングを自分達の都合が良いようにできるとはいえ、決して気持ちのいい話ではないのだ。

新婚だつたら普通、その日の夜の戦闘はベッドの上で、だろうに。

そんな考えが頭をよぎり、思わず苦笑する勇一。これじゃ夕風のネタに文句を言えないじゃないか、と思うのだ。どちらかといえば、朱に交わればなんとやら、の部類だろうが。

一応、念入りに体を洗ってバスルームから出る。パジャマを持ってきてはいるのだが、面倒だったので洗面台に置いてあつたホテル備え付けのナイトガウンを着た。

どうせ戦闘になればイグニッションするのだから、服装で何かが変わるわけでもない、というのはイグニッションカードを扱う能力者の常識であるし、事前に頭に叩き込んでいた知識でもある。

洗面所から出てくると、入れ替わるように、何やら嬉しそうな夕風が「シャワー浴びてきますねっ」と言つてバスルームの方に向かつていった。深刻でない嫌な予感が頭をよぎるが、考えないことにする。

夕風の後ろ姿を見ながら、以前、知人から借りた漫画にあつた「背中をお流しますっ」とか言いながら新婚がいちゃつく、というネタをされずに済んで良かった、と今更のように安堵する。なまじ普段の言動から想像できてしまうから怖いのだ。

もっとも、勇一の本心というか心の奥底を知る者なら、「流石に

こんな時にそこまでアレなことはしない」と信頼していたから、事前に釘を刺したりはしなかったのだ、と言うだろうが、そこまで自分を理解しているわけでもないのは仕方がないだろう。

さて、何をしたら良いだろうか。こういう場面でどうすればいいのか判らない。微妙に間が持たない、というか何をすべきか判断がつかないのだ。まあ、こんな状況に場慣れしている高校生が居たら不健全そのものだが。

今まで見たドラマなどの知識を総動員してみる。夜景を見ながらワインとか飲んだたよなあ。駄目だ自分は未成年だし、能力者が飲酒するわけにもいかない。

ああ、そういえば夜景が綺麗だ、と外を見ながら思う。

何しろ、地方という程ではないにせよ都会ともやや離れた新興住宅地で生まれ育った彼は、あまり高所からの夜景を見る機会がなかったのだ。強いて言えば何度か、京都や大阪で見た記憶はあったが、海沿いの景色となれば今回はじめてだ。

緩やかな曲線を描いている東京湾のラインが、街の光で彩られている。少し離れた所には点滅しながら動く光も見受けられる。車が鉄道か、ぱつとは判らないがその手のものだろう。

勇一自身の主観では数分程度の短い時間だと思っていたのだが、実際には15分以上景色を眺めていたらしい。

「夜景……ですか？」

後ろから声をかけられて軽くびっくりする。少し目を横にずらせば、窓ガラスに映った夕風の姿が薄く見えた。

「わあ……綺麗ですね、すごいですっ。」

横にやってきた夕風も、勇一がしているように外を眺める。むしろ勇一よりはしゃいでいる、とも言える。何しろ、元々テンションが高い状態だったのだから。理由は言うまでもない。

「私、今日のことは絶対に忘れません。たとえ依頼の為でも、お芝

居ても、勇一様が色々してくれて、本当に嬉しかったんですから……。」

「あ、ああ……。」

大げさだな、と苦笑してしまう。勇一自身は、彼の将来のことなどあまり考えていなかった。別に刹那的なわけでも無計画なわけでもないが、とりあえず大学に入って、どこかの会社でサラリーマンになって、という現実的な未来を描いていた中学生だった頃から比べて、環境が変わりすぎて思考が追いついていないのだ。

もちろん、夕風との関係についても同じである。今のままいけば、おそらく近い未来に「別れる」ことは無いだろう、という気はする。たまに細かいことで呆れることすらあれ、別に嫌う理由はないのだ。夕風も、自分に対してそんなそぶりは少なくとも見せていない。

だが、将来本当に結婚するのか？と考えると、まったくもってイメージが湧かない。ただでさえ、普通に育った高校生にとって、結婚は知識の範囲にはあっても、実感などなかった。

ましてや勇一は（そして夕風も）銀誓館の能力者である。そもそも銀誓館の能力者である生徒が卒業してからどのように活動するかなど彼は知らなかった。

卒業後の環境については、まだ誰も知らないと言っべきだろう。銀誓館学園の能力者である生徒の、第一期生が卒業したのがつい数年前。大学に進学したものは、まだ卒業すらしていないのだ。要するに手探りの世代である。

「将来、どうなるんだろうなあ。」

と、夕風には悟られないようにぼーっと考えていると、横から夕風の声がした。

「もう夜ですし、そろそろ……その……。」

壁に掛けられた時計は10時過ぎを指している。夜中、という条件には少し早いかもしれないが、試してみる価値はあるのかもかもしれない。

勇一にとっては本音を言えば、できれば1回で終わりにしたいからもう少し待ちたい気もしたが、それまで何をしているか、と考えると、何も案がないのだから仕方ない。ぼーっと過ごすわけにもいかない、というのは難しいものだ。

そこでふと、夕風の服装に目が行く。シンプルな藤色のナイトドレスだった。家でこんなのを見たことはない（むしろ、やや強硬に夜間着はパジャマに限定していた）ので、今夜のために買ったのだろう。

薄すぎるわけでもなく、かといって濃くもない色合いが、夕風の白い肌や黒い髪とあっている気がする。派手な装飾こそないが、小限のフリルなどが程よく健康的な色気を演出している。

元々、年齢という概念がややふやな来訪者だが、学習カリキュラムの関係で中学3年生の授業を受けている

というか、夕風って胸大きいよな、と一瞬思った自分の後頭部を殴りたい気分になる。勇一だった。

「あ、そうだな……それじゃ。」

照れ隠しも含めて（むしろ泥沼にハマる気もしたが）ベッドのほうに移動する勇一。夕風も嬉しそうについてくる。いや、これ以上色々考えてしまうと危険なので後ろを見たわけではないが、足音で判る。

ベッドに横になった時には、既に勇一はかなり緊張していた。とはいえ、この後のことを考えることで、逆に落ち着くことができたそう、これはゴーストと戦うための前フリであって、集中すべきことは別にあるのだ。

そもそも普段は布団で寝ている勇一にとって、ベッドの感触はかなり不慣れなものだ。それが柔らかいベッドだと尚更である。更に同じベッドに他の人が入ってきた感触など、彼にとってははじめての経験だった。

とはいえ、そんな感触に浸っている余裕はない。夕風が、既に自分の横に寝ているのだ。距離にして50cmぐらい。色々な意味で、

もう後戻りはできない。

ややぎこちない動きで、それでもできるだけ自然に見えるように、と意識しつつ、そっと夕凧を抱き寄せる。すぐに夕凧の吐息が顔に当たるぐらいの距離になる。

『落ち着け、これは演技だ。少し抱きつけばすぐに特殊空間に行くはずだ。それに演技で失敗したら取り返しがつかない。』

時間的に大丈夫じゃないかもしれない、という懸念はこの際忘れる。いや、実は少しだけ考えていたのだが、その場合、暫くの間本気で「やらなきゃいけない」のかもしれない、と考えたところで、考えるだけ疲れる気がして思考をストップさせていたのだ。

頭のなかで『大丈夫だ』を何度も念じながら、夕凧の背中に手を回し、自分の側に引き寄せる。

既に夕凧の身体は自分の身体にあたり、柔らかい感触を感じていた。別に夕凧のことが嫌いなわけではない、むしろ好きではあるが、これは不味い。学生として非常に不味い。

最初に肩に手を触れてから、もう何十分も経ったような気分だ。実際にはまだ数秒なのだが。

そして、「それ」はやってきた。

「……っ!？」

視界が歪んだ気がする。苦しくはないが、ねじられたような感じを不意に覚える。

たとえばエレベーターで昇降したり、飛行機が離着陸したり。そんな微妙な浮遊感が、様々な方向から襲ってくる不思議な感覚だ。目の前は真っ暗になっているが、別に体調に異常は感じない。

成る程、これが特殊空間に引きずり込まれる、ということか。覚悟はしていたし、心の準備もできている。とはいえ、これから戦闘が始まることに緊張を感じていた。彼にとってはじめての、積極的なゴーストへの接触と戦闘なのだから。

不意に、再び目の前に光が戻る。

In the Dream, or...

最初に勇一の目に入っただのは、先程まで居たホテルの部屋と似たような内装の壁だった。だが、先程……つまり本来の空間より、部屋が心なしに少し暗くなっているように感じる。

そして周囲を見回せば違いは歴然としていた。自分達が居る、壁際にあつた筈のベッドが部屋の中央近くにある。

それだけではない。部屋は窓がなく、四方が壁になっている。三方向までは先程のホテルの部屋と壁紙は同じなので見間違えるかもしれないが、残りの一方は決定的な違いがあつた。

壁に大きなどす黒い染みがあるのだ。どう見ても血痕である。だが、心の準備ができていた勇一にとっては逆に安っぽいホラーのようない印象しか受けなかった。

むしろ「結婚式に関する地縛霊だから血痕かよ。」と一瞬思っぐらいに余裕ができていた。所謂、誰が上手いこと、である。

周囲の確認が終わり、ベッドの上に立ち上がると同時に起動する
イグニッション
勇一。

ベッドの上に立つ、というのは世間一般で言えば行儀の良い話ではないが、敵がどこから来るか判らないので、迂闊に動かない方がいいことを考えれば致し方ない。

横を見れば既に夕凧も起動を済ませており、いつもの巫女姿でベッドの上に座っている。別に何か調子が悪い、という感じではなく、起き上がる途中の姿勢のまま、周囲を警戒しているだけだ。

不思議なもので、特殊空間に入ったあたりで緊張は殆ど無くなっていたが、今度は着慣れた制服の感触が、良い意味での緊張を生じさせているような感じさえ受ける。

勇一たちは奇襲を警戒していたが、どうやら地縛霊の側にはそんな気はなかったらしい。そして一呼吸置いて、耳を覆いたくなるよ

うなけたたましい悲鳴とともに「それ」は勇一と夕風の前に姿を現した。

ぱっと見た限りはウエディングドレスを纏った女性だが、半ばヴェールに隠れた顔は青白く生氣はない。また、着ているドレスもボロボロであり、そもそも体の細さは人間のそれではない。手には何も持っていないようだ。

いつそ地縛霊というよりリビングデッド、それも普通のホラーに出てくるような安っぽいゾンビ、と言ってもいいような風貌であるが、油断するわけにはいかない。

相手はスクリーンの中に居る作り物ではなく、明確に自分の命を狙ってくる存在だし、ここは地縛霊のテリトリーである特殊空間なのだから。

地縛霊が姿を現したのは部屋の隅だ。少し距離があるし、他に敵も見あたらない。であれば、まずは足場が不安定なベッドから戦闘をしやすい床に降りることが得策と言える。

即座に、事前の打ち合わせ通りに動く2人。

どこからともなく現れた黒い蟲が、敵に向かって間合いを詰める夕風の鎖剣にまわりつき、吸い込まれるようにして消えていく。

一方、勇一は少し離れた所に移動しつつ、右手に握った詠唱銃を頭上に掲げて斜めに回転させる。旋剣の構え僅かに詠唱回路から零れた詠唱銀が周囲に散り、己の能力を強化させた彼を、まるで飾り立てるかのようには舞い散る。

初手はお互いに自己強化を行い、あとは回復はあまり考えずに火力で圧倒する。人数が多く、技量も互角かそれ以上の二人の考えていた作戦は、シンプルであり、それ故に実行するのは簡単でありながら、効果的な作戦だった。……否、作戦だった筈だ。

だが、その瞬間、勇一の耳に「嫌な声」が響いた。悲鳴でありながら、まるで誘惑するような、それでいて何かしら強制力を持っているような声が空気を震わせたのだ。とっさに防御の体勢を取ろうとする勇一だが、そもそも声が相手では防御も何もなかった。

とつさに自分の体の状態を考える。傷を受けたような気はしない。精神的にも、多少嫌な感じが残ったものの、ダメージという程のものを受けていない。手元の詠唱兵器も特に異常は見られなかった。

前に居る夕風を見る。もはや見慣れた黒い長髪と、白い着物の袖、そして緋色の袴が見える。外傷があつたり血がついたりしている風はなく、特に何かされてたようには見えなかった。

少なくとも、外傷はなかった。が、何か不穏なものを感じる勇一。外見的なものではない。強いて言えば、気配が変化した、とでも言うような、言葉では説明できない何かを感じ取ったのだ。そして、それは正解だった。

振り向いた夕風の目は、どこかどんよりとした感じだ。少なくとも勇一は、戦闘中の夕風がこんな目をしているのを見たことがなかった。いや、それ以前に戦闘中以外でも記憶にない。

「おい、大丈夫か……？」

とつさに口から出た言葉と同時に、夕風がこちらに突進してきた。ふわりと鮮やかにベッドを飛び越した勢いのまま、腕を前に突き出す。その腕に握られた鎖剣の、刃の短い刀が、勇一にとっては見慣れた紅い炎を纏っている。

「うおっ！？」

右手に持っていた詠唱銃の銃身でとつさに刀を跳ね上げる。炎が軽く腕を焦がすが、たいしたダメージではない。少しヒリヒリとした痛みを感じる程度だ。紅蓮撃を放った夕風の勢いをそのまま受け流し、自分の後ろ側に行くに任せて体勢を立て直す。

とつさの、しかもまさかの夕風からの攻撃だったが、的確に捌けたのはまさに、夕風との戦闘訓練の成果と言えるだろう。迂闊に喰らっていたら、一撃でかなりのダメージを負っていた筈だ。

「おい、夕風……」

振り返ろうとする夕風に問いかける。問いかけながらも、勇一は状況をかなり正確に把握していた。要するに先程の攻撃は相手を魅了し、自分に都合が良いように操る技、といったところだろう。

勇一にとって比較的容易に耐えられたとはいえ、たった2人しか居ない状況で、2人ともが魅了されたら行きつく先は死、しかない。タイミング悪く先程の攻撃を貰ってしまったら、どうしようもない。否、それよりも。夕凧がこちらを攻撃してくるのを、何とか捌かなければいけないのだ。2対1で相手を追い込む筈が、一気に逆転してしまった。

「うおっ!？」

夕凧が状態異常にかかってしまったこと自体は、そもそも防ぐ方法を持たない上、相手の攻撃方法も不明確だったため対策のしようがなかった、と言える。

だが、もう1つのミスを勇一はおかしていた。夕凧のことに意識を集中させるあまり、勇一は背後から思い切り攻撃を受けてしまったのだ。そう、後ろには地縛霊が居るのだ。

背中に激痛を感じ、とつさに手を後ろに回す勇一。手に触れたのは金属の冷たい感触だった。自分の背中に、あまり大きくない何か刺さっている。

深く考える余裕はない。とつさに引き抜いたそれは、外見・持った感触ともに、ごく普通のナイフだった。だが、どうやらアビリティのような何かで作られたものらしく、詳しく確認する前に銀色の粉になり、朽ちるかのように散ってしまう。

そもそも、敵の攻撃方法にまで頭を回す余裕はあまりない。挟み撃ちをされたら、本当に体が保たなくなる。そのことを勇一は、夕凧や先輩との模擬戦で痛いほど体で理解していた。

それ故に、不利な位置取りへの対応は素早く行うことができた。とつさに勇一がとった行動は、一気に地縛霊との距離を詰めることだ。

もちろん、手札が判らない相手に近づくリスクは頭をよぎったが、上手に地縛霊と近接戦をすれば、夕凧の位置に気をつけることで、

簡単には挟み撃ちをされずに済む。

幸い、地縛霊の近くには背にすることが出来る壁もあるのだ。

もちろん、壁に何かしらの細工がなされている可能性もあるが、そこまで考えていたら身動きが取れない。ここは一か八かの賭けに出るしかないのだ。どうせ作戦は崩壊しているのだから。

イグニッションしていない時なら為し得ない速度で、地縛霊の横をすり抜けるように走り抜け、勢いを使って片足だけを軸にして強引にターン。一瞬で壁に背を向けて立つ。

先程刺された背中が痛んだが、気にしてはいられない。常人であれば即死しかねない傷だが、能力者にとって、完全に無視するわけにはいかないにせよ、一発や二発でどうにかなるものではない。

強引に接近したついでに、詠唱銃の0距離射撃を地縛霊に叩き込もうとする勇一。詠唱兵器では、動きながら正確に射撃をすることはできないが、近接攻撃に近い動きで移動しながら撃ち込むことはできる。

だが、銀色の線状に光をまき散らす弾丸は、地縛霊が一瞬前に居た空間に、そのくすんだウエディングドレスを掠めた一本の線を引いただけに終わった。

そして、その瞬間には攻防が入れ替わっていた。勇一が体勢を立て直す間もなく、地縛霊の後ろから風を切って、銀色に輝く刀が飛んでくる。

それでもぎりぎりで体を捻って避けた勇一は、すぐ横の壁に、ドスツ、という鈍い音を立てて抜き身の刃が刺さる音を聞いた。直後にジャラリ、という鎖の音がする。刀の後ろについた鎖に引っ張られて、鎖剣が夕凧の手に戻っていった。まだ夕凧は先程の位置に居るのだ。

「つつ……さて……」

最低限、挟み撃ちされない位置取りは確保したものの、どうするか考えあぐねる勇一。単純に戦術の話であれば地縛霊を攻撃するし

かないのは判っているが、他に何かできることはないか、と考えたのだ。

勇一自身はあまり意識していないが、危機感を感じつつも冷静に行動できているあたりは、訓練の賜物と言えた。

だが、言うまでもなく訓練は所詮、訓練である。想定外の攻撃を受けたり、想定外の事態への対処を強要されたこともあったが、失敗したとしても死ぬことはなかった。

だが、今回はそうはいかない。だから意地でも、何とかしなければいけない、のだが。

そんな勇一の思考は、銀色に輝く光によって中断された。いつの間にか地縛霊の右手には、先程のと同じような銀色のナイフが握られている。

この状況をどう打開するか、ということに気を取られていた為、勇一がそのことに気がついた時には、既に横薙ぎの斬撃が勇一の左肩を切り裂いていた。飛び散る鮮血が地縛霊が着るくすんだ白色のドレスに、細かい飛沫模様をつける。

毒や痺れは感じない。どうやら単純に斬られただけで、ましてや右利きの勇一にとって左肩の負傷はそこまで大問題ではない。

左手の感覚がなくなったわけでもなければ、動かない感じもしていない。大丈夫だ、一度や二度、受けただけで憂慮すべきダメージではない。

とはいえ、このままダメージを甘受し続けるわけにもいかない。夕風がいつ回復するか判らないし、勇一に異常な状態に陥った仲間を治癒する術はない。

もちろん誘惑状態から自然に回復することはあるが、それを期待するのは運に命を委ねることと同義であり、万全を期すなら回復しないことを前提に行動しなければならない。

しかし、夕風が回復しないまま戦い続ければ、1対2での不利な戦いによるダメージが蓄積するのは言うまでもない。

要するに、冷静に状況を捉えれば捉えるほど、自分が置かれ

ているのが危険な戦局だということを再確認することになっていた。もちろん冷静さを失ってパニックになるよりは良いが、冷静であれば何でも解決するわけでもないのだ。

「おい、夕凧……夕凧っ！」

右足を軸にして左半身を後ろに逸らし、垂直に振り下ろされた地縛霊のナイフを避けながら詠唱銃を構える。

詠唱銃から迸った黒い影ダークハンドが生き物のように伸び、とっさの回避に失敗した地縛霊を一瞬で掴み取る。

巨大な人間の掌の形をしているそれは、握りつぶすような動作をしながら消え去った。元々、持続的に拘束するような能力はないが、地縛霊にダメージを与えることに成功している。

だが、勇一の側も無傷ではない。地縛霊にダメージを与えたのとはほぼ同時に、右の脇腹に日本刀が刺さっていた。いつの間にか前に出てきた夕凧からの斬撃……いや、刺撃だ。

追撃を防ぐため、とっさに脇腹に刃を食い込ませたまま横に飛ぶ。刃は鎖に引っ張られて夕凧の手に戻っていった。口の中に塩のような生臭い味がする。もう何度も経験して慣れてきた血の味だ。

「くっそ……何とかならないか……！？」

悪態をつきつつ、詠唱銃を地縛霊にまっすぐ向けて発砲する。先程と同じように飛び出した黒い影が地縛霊に殺到するが、先程の攻撃で学習したのか、地縛霊は滑るように横に避けた。

アビリティにより生み出された黒い腕ダークハンドは、地縛霊の居た空間の空気を空しく握りつぶし、そのまま消失する。

攻撃後の隙を突いて斜め前から鎖剣が飛んでくるのを、勇一は一歩前に踏み込むようにして躲す。見慣れた光が視界の隅に輝いたので咄嗟に体が動いたのだ。まさに夕凧との訓練の賜物、である。

だが、正面には地縛霊が居る。前に出てきた勇一を迎え撃つように、腰のあたりでナイフを構えて突っ込んでくる。ナイフによる攻撃は踏み込みが浅いかわりに、体勢を立て直すのも容易なようだ。

前に出かけた勢いを無理矢理、地面を蹴るようにして殺し、後ろ

に飛ぶ。地縛霊の攻撃は勇一が一瞬前まで居た場所を切り裂いた。否、勇一が着ている制服のシャツの、胸の辺りに横一文字の切れ目ができていた。まさに間一髪、だ。

だが、その回避の代償は大きかった。勇一が避けたために空振りに終わり、鎖に引っ張られて回収する途中だった夕風の鎖剣が勇一の左足、ふくらはぎのあたりを切り裂いたのだ。

ダメージそのものは大したことはなかったが、それでも結構な量の鮮血が飛び散り、カーペットを汚す。それ以上に、無理な飛び退き方をしていた上に、想像外の脚の痛みが追加された結果、バランスを崩し、勇一は思わず尻餅をついてしまったのだ。

「おわっ……!？」

体勢を崩した勇一の頭上に、地縛霊が逆手に持つナイフが光を反射して輝く。空振りに終わったとはいえ、勇一はかなり近くまで来ていた地縛霊にとって、ナイフを投げるまでもなく切り裂ける距離だった。

おおよそウエディングドレスには似つかわしくない、俊敏さと殺気だけの俊敏な動きで、勇一の頭を狙ってそのまま垂直に振り下ろされるナイフ。これは躲せない。頭への直撃は避けられそうだが、体までは。

振り下ろされるナイフの動きが、まるでスローモーションを見ているかのように、妙に緩慢に感じられる。

ナイフの銀色が、部屋の光源の関係か、銀色からだんだんオレンジ色に変化する。そのまま赤く染まってもおかしくないぐらいに。

そして、ぎりぎり体を捻った勇一の右肩に、ナイフが刺さる。…が、その痛みは思ったほどではなかった。

否、ナイフが刺さった瞬間、勇一の意識は自分の体の痛みには既に向いていなかった。まさに肩に地縛霊の攻撃が達する直前、強烈な紅蓮の光が地縛霊の上半身を包むように爆ぜたのだ。

まず光が地縛霊の上半身を包み、その直後に飛び込んできた炎が焼き尽くした。ナイフによるダメージが思ったより軽かったのは、地縛霊の肩から先が爆発ではじけ飛ぶように斬り落とされ、明後日の方向にナイフごと飛んでいったからだった。

爆炎そのものは地縛霊の上半身全てを包んでいたように見えたが、どうやら穿ったのは右肩のあたりだったらしい。それでも、これだけの部位を吹き飛ばされれば人間なら致命傷だ。

そして、もはや人外存在である地縛霊にとっても、このダメージは耐えきれるものではなかったらしい。何やら口から怨嗟のうめき声のような音を漏らしながら、地縛霊はゆっくりと消え始めた。消える、というより粉になっているように見える。風が吹いているわけでもないが、地縛霊の姿はゆっくりと白い灰が散るように空中に消えていく。よく見れば脚を幾重にも縛っていた鎖は、どんどん錆びて、ここだけは黒い粉となってから散っていた。

「勇一、様……。」

地縛霊が消え去った後ろに立つ夕凧は肩で息をしながら、少し青ざめている。自分を攻撃してしまったことを気にしているのだろう。不確定要素の存在は知っていたが、地縛霊の攻撃に『魅了』がある、とまでは予想していなかったことだし、一種の事故のようなものだ。

勇一は別に腹を立てていなかったが、同時に、夕凧の性格を考えれば、不本意とはいえ勇一に刃を向け、傷つけたことを気にするであろうことも想像がついていた。だから、つとめて冷静で、元気そうな声で夕凧に呼びかける。

「大丈夫だって、気にするなよ……。」

とは言いつつ、実際には今頃になって体中の傷が痛んできている。

詠唱兵器の防具はある程度のダメージを防いでくれるが、どうやらその限界はとうに越えてしまっているらしい。

とはいえ、行動が出来なくなるほどではない。負傷はしたが重傷ではない、と言ったところか。

ゆっくり立ち上がりながら、まだ青い顔をして茫然自失気味に突っ立っている夕凧の方に一步踏み出す。

気がつけば、周囲の視界がぼやけてくる。地縛霊を倒したため、特殊空間が無くなるうとしているのだらう。だが、勇一はそれを気にせず、夕凧にゆっくりと近づいた。

幸い、特殊空間に入り込んだ時ほど強烈な感覚ではない。軽い浮遊感と、周囲が暗くなっている感じだけだ。だから、夕凧の震えている肩を、両腕でしっかりと抱きしめることは簡単だった。

そして元の部屋に戻った後も、しばらく2人は抱き合っていた。

同じ頃。

青年はかなり焦っていた。運命予報士から「見えない情報がある」ことは示唆されていたが、まさかそれが複数の、リリースが使役するリビングデッドとは想定外だったのだ。ましてや、それぞれが結構強く、結果として仲間は少なからぬ被害を強いられた。

現在、立って戦えるのは4人。メンバーのちょうど半分である。皆、少なからず消耗しているが、すぐに倒れる、という感じではな

い。残りの4人も継戦不能になったところで仲間が避難させたため、今は廊下の角にいる。

だが、ここは戦うべきか、引くべきか……。青年だけでなく、戦っていた4人の頭をよぎった逡巡が、リリースに逃亡の隙を与えた。

既にボロボロになったワンピースを翻して逃げ出すリリース。咄嗟のことに、4人の反応は遅れた。

「まずい、追いかける！」

仲間の誰かが叫び、皆が追いかけはじめる。だが、その時リリースは、今戦っている相手とは別の能力者の存在を感知していた。

リリースの頭の中を打算がよぎる。

別の場所に居る、能力者っぽい存在。数は決して多くない。アタシを挟み撃ちする為の配置なら、もうとっくに出てきておかしくない。いや、あの辺には地縛霊が居たから、おそらくそちらの退治に来たのだろう。

だとすれば。

リリースは非常階段のある避難口に向かって、慣れ親しんだホテルの廊下を駆け抜けていた。

My Dream is coming to the End

「ごめんなさい、本当にごめんなさい……。その、何と断言していか……。」

「いや、もういいって……気にすんなよ……。」

絨毯が敷き詰めてあるホテルの床に土下座している夕凧と、横で半ば正座している勇一。勇一からしてみれば、何となくこうなることは想像できていたので「やっぱりか」という感じだが、さてどうしたものか。

戦闘が終わり、本来の場所　ホテルの部屋に戻ってきて10分程経つが、夕凧はずっとこんな調子だった。どうしたものかなあ、と軽く悩む勇一。

だが、そんな平和な(?)空気は、突如として破られた。扉を文字通り「斬り壊して」何者かが部屋に乱入してきたのだ。

それが何者か確認するより先に、勇一の首に腕が巻き付けられた。既に戦闘が終わったもの、という意識だったために対応が遅れるが、それは致し方ないだろう。

首が絞まる。とっさにイグニッションすることはできていたが、それでもこの体勢はかなり苦しい。呼吸すらままならず、ましてや首の骨が軋んでいる。

「リリース……っ!」

夕凧の声で勇一は事態を把握した。成る程、この建物にはもう1匹、ゴーストが居たのだ。戦闘が終わったと思って油断していたが……。

「おっと、動くんじゃないよ!この男を殺されたくなければね!」
「……っ!」

夕凧が悔しそうな声をあげる。勇一といえば、首を絞められて

いる関係で、斜め上、天井のあたりしか見えない。だが、自分が人質にされていることは理解できる。しかし……リリス班は、まさか全滅したのだろうか？

夕凧が壊された扉の側を見る。リリス班のメンバーが居ないか期待していることだが、それを見たリリスは嘲笑うだけだった。

「無駄だよ、アタシは非常階段を壊してから来たからね。あいつらが来るのはまだ先さ。」

リリスがケラケラと笑い声をあげる。だが、その瞬間に生じた僅かな隙を夕凧は見逃さなかった。飛びかかるようにリリスに体当たりをかけたのだ。勇一の首を絞めていた腕が一瞬緩む。

「勇一様っ！」

夕凧の声にあわせて、渾身の力を込めてリリスの腕を払いのける。息が詰まりそうになるが、何とか払いのけることに成功した。半ば咳き込むようにして息を吸い込む。

「くっ……この、小娘っ……」

「私だって……勇一様の為に、戦えるんだからっ……」

夕凧がリリスを押さえつけてくれているのは気配で判る。何とか攻撃したいところだが、体がついてこない。思わず膝を折って、両手をついてしまう。

情けないと思うが、先程の戦闘の疲労^{ダメージ}に加えて、暫く息ができていなかったのが堪えた。もともと、普通の人間なら首の骨が折れてもおかしくない強さで絞められたのだから、生きているだけでも十分有り難いが。

「夕凧、ちょっとだけ……押さえていられる、か……」

「大丈夫です。私が、何とかしますっ。」

「おい、夕凧っ……」

その言葉の途中で、何か割れる音と共に吹いてきた突風に煽られて転びかける。腕で顔を隠しながら風が吹いてくる方向を見ると、窓のガラスが1枚、綺麗に割られていた。夕凧がリリスに組み付いたまま、壁際にむりやり移動して窓ガラスを蹴破ったのだ。

「私……。絶対に忘れない、って約束したのに、あんなこととして……本当に……。」

咄嗟に、夕凧が何をしようとしているか理解した勇一の顔が蒼白になる。

「まで、夕凧、気にしてないんだ、そんなことやめろっ……」

「どちらにせよ、今の勇一様を危険に晒しながらここで戦うことはできませんから。」

ふっと寂しそうに笑った夕凧の体が、リリースごと漆黒の空に躍る。

「夕凧っ！」

頭がまだクラクラし、体の力もまだ完全には入らないが、咄嗟に窓際に移動する。

抱き合うようにして落ちていく夕凧とリリースからほぼ同時に、2つの光が飛び散った。片方は勇一が見慣れている、夕凧の放った紅蓮の炎だ。もう片方はリリースの攻撃だろうか、炎というよりは電撃に近い青白い光だ。

そして、夜の暗い水面に白い柱が盛大に立った。

「夕凧　　！！」

その叫び声を受け止めるのは、遙か眼下の、白い泡で飾られた黒い水面だけだ。

My Dream is coming to the End (後書き)

何というか、確実に続くような終わり方をしていますが、とりあえずここで一旦、ストーリーを〆ようかと思います。

もちろん話はまだ続くのですが、幾つかの理由で明確な区切りとしておきたいので。

それでは、『或る土蜘蛛の狂想曲』3』でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4143w/>

或る土蜘蛛の狂想曲 [2]

2011年10月10日03時10分発行